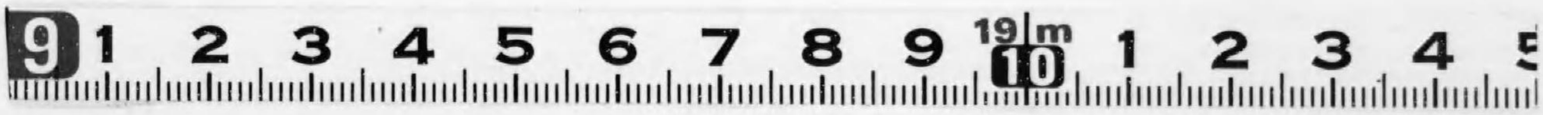
503
108

設



503-108

人生を超越する力

トルストイ著
内田靜衛譯

序

人間生活の理想は、清く樂しく正しく、其の日を送るにある、其の方便として、玆に哲學が起り、宗教を生じた。

人間が感情の動物である以上、理論としては神人不二、是身即佛を肯定しながら、尙且つ、我れ以外の大きなものに倚賴して、精神の安定を得ようとするが、これ人情の自然である。

理論として、清く樂しく正しく、其の日を送るのが、宜敷いと知つてゐても、愈よとなると、實行が出來ぬ。

學問のみでは駄目だ、信仰がなくては人間生活に熱がない、俗に言ふ金魚の刺身のやうなものである、見かけ倒しで嚙みしめて甘味がない。

廻り遠い理論などに頭を惱ますよりも、先哲の敎へるところを疑はず、唯だ信じて

大正 11. 6 27 内交

其の通りに行ひさへすれば、何の苦もなく人間生活の理想に達する。

さすれば、吾々の住む現前の世界は直ちに淨土、お互ひ人間は此の儘で即ち神となれる、佛敎の涅槃の妙境も、基督敎の肉に宿れるロゴスの目的も玆にある。

基督が出世の本懷は、此の世に神の國を建てるにあり、そして、世界の全人類を神の子とするにある。

人生は不可解であるが、超越すれば其處に安定がある、山は雲が掛かつて見えないが、登つてさへ行けば花咲き鳥囀るのが目擊される。

此の人生を超越する力は、取りも直さず信仰である、信は力なりと言ふのは、此の事を指すのである。

我が知人、内田靜衛氏は病みて危篤に瀕したが、信仰の力で九死に一生を得た程の聖徒である。

しかも其の信仰はトルストイに入りて、基督に至つたものである、人生を超越する力の如何に偉なるよ、本譯の如き良書を世に公けにされたのも偶然でない。

大正十一年四月八日

哲學を奉ずる使徒

村田豐秋

目次

第一章　序論……一
一　トルストイ研究……一
二　トルストイの聖書觀……三
三　トルストイの無抵抗主義……一二
四　トルストイの裁判論……一五
五　トルストイの非戰論……一九
六　トルストイの國家觀……二二
七　トルストイと露國……二四
第二章　社會論……二八

一　社會組織の事實……二八
二　帝國主義と社會政策……三一
三　富の分配……三五
四　社會と貧民……三七
五　社會制度の缺陷……三九

第三章　貧富論……四四
一　基督の獅子吼……四四
二　貧しき者は幸福か……四六
三　貧富の差別は如何……四九
四　貧富の意味……五三

第四章　平等論……五七
一　人間の本來……五七
二　差別の世相……五九
三　人間の鬪爭……六一
四　我慢　我執……六五
五　平等に歸れ……七〇
六　地上の天國……七三

第五章　幸福論……七六
一　富と權力……七六
二　皇帝と貧乏學者……七七

三　病氣と死……八三
四　幸福を何所に……八六
五　運命と幸福……八八
六　富人と貧人と旅人……九三
七　貧苦より幸福……九七
八　幸福の使……一〇一
九　運命の轉換……一〇五
一〇　幸福の意義……一一一

第六章　運命論……一一五

一　自然と運命……一一五
二　運命と因果應報……一一七
三　運命觀五則……一二〇
四　天地の德……一二二
五　運命の祕奥……一二五
六　運命の恩寵……一三八
七　運命の眞意義……一三一

第七章　信仰論……一三五

一　人間の至情……一三五
二　信仰の目標……一三九
三　神の愛によりて……一四八
四　信仰の意義……一四九
五　信仰の力……一五三

六 神の子イエス……一五八
七 三教比較……一六〇
八 信仰と幸福……一六六
九 信仰と生活……一七一

第八章 生活論……七九

一 二つの要求……一七九
二 よりよき生活……一八三
三 内生活の欲求……一八七
四 生活の情味……一八九
五 生活の完成……一九七
六 生活と宗教……二〇三

七 人生の疑義……二〇五
八 懐疑と努力……二〇九
九 人生の常態……二一三

第九章 生命論……二一八

一 墓の彼方に……二一八
二 不滅の生命……二二一
三 人類の將來……二二六
四 人類の進化……二三一
五 悲觀と樂觀……二三四
六 一元的宇宙觀……二三六
七 唯物的現實觀……二一八

八　二つの哲學思想……二四〇
九　人間の家……二四三

第十章　家庭論……二四九
一　家庭の力……二四九
二　家庭と女……二五一
三　母の感化……二五四
四　母親と子供……二一九
五　文化と婦人……二六二
六　家庭と宗教……二六七

第十一章　人格論……七一

一　人格の要素……二七一
二　價を求むる人……二七三
三　價を待つ人……二七七
四　人格の修養……二七九
五　人格と健康……八三

第十二章　修養論……二八九
一　人間の性は善……二八九
二　修養の第一歩……二九一
三　時の觀念……二九七
四　偉人の生涯……三〇一
五　逆境の修養……三〇四

目次

六　克己の修養……三〇七
七　人間の完成……三一五

——目次終——

人生を超越する力

トルストイ原著
内田靜衛譯述

第一章　序論

一　トルストイ研究

トルストイが露西亞の貴族であつて、然して大の平民主義者であつたことは誰も知つてゐる。彼は基督教の信者であつた。

彼の思想、彼の主義、彼の宗教はこれだけ言へば盡してゐるやうに感ぜられるが然し彼は尋常一樣の平民主義者ではなかつた。普通唱へられる世間の基督教信者と

は大分毛色が變つてゐた。

日本にトルストイ熱が盛になつたのは今より三十年前のことである、當時ある一人の新聞記者は『日本にはトルストイに當る思想家なきか、何ぞトルストイを崇拜する日本人のかく多數なるや、日本人中立つてトルストイを駁ちうる者なきか、何ぞトルストイを信奉せるもの多きや』と叫んだ。

それ程にトルスイイは人氣があつた。日露戰爭以來、しばらく途絶えてゐたが、最近また勃興して來た。

彼の生れた露西亞は亡びたけれども、彼の思想は永遠に亡びる時はあるまい、否彼自身さへも死んだけれども彼の說いた主義、彼の抱いてゐた思想、彼の信じた宗教は、永遠に彼を信ずる者の光となつて生きてゐる、彼を信ずる者にとつては、彼の思想は生命の糧であり力である。

廣袤、何億里を有し、數億の人を有する露西亞その國よりも彼は偉大である、それは彼を信ずる人にとつては勿論、彼を信ぜざる人にとつても、彼を偉大でなかつたとは言はれぬ。

二　トルストイの聖書觀

トルストイは古今無類の獨斷家である、偉人の常として獨斷は往々免かれ難いものである、彼も亦然りであつた、獨斷とは思想上の利己主義である、彼は卽ち思想界の大利己主義者であつた。

古來の哲人はすべて獨斷家であつた、然して彼は先哲古賢の獨斷を攻擊しながら彼自らも亦大なる獨斷であつたことに氣が付かぬ、むしろ彼が攻擊するところの古賢先哲以上の大獨斷であつた。

彼の如く大膽に他人の獨斷を攻擊したものはなく、然し自らの獨斷を主張する事彼の如く大膽なるはない。

彼は、一たび聖書を繙くや、その意緒の趣くに任せて解釋した、解釋し得ざる所は不可解を唱へ、竄入を可とすればみだり竄入し、添削を可とすれば躊躇なく添削した、人の苟くも爲さんと欲する所彼の爲さゞるはない。

ルーテルも亦大膽なる獨斷家であつた、彼も亦遺憾なく新約正經の價値を論じて過度に羅馬書を掲げて、然も同時に手きびしく雅各書、ヘブライ書を貶した、然もルーテルを以てトルストイに比すれば猶頗る無邪氣であつた。

ルーテルの爲すところは、唯聖書の大體論に過ぎなかつたが、トルストイに至つては直ちに其内容の改削を企てた。

ルーテルは聖書の編輯を改めやうとしたに過ぎなかつたがトルストイに至つては聖書中の文字をも書き換へやうとしたので有る、トルストイはその著『我宗教』に言つて曰く

余の之(聖書)を悟りしは神學的探究や深玄なる智識の結果にあらず、單に一切の註釋をば我胸中より排斥せしが故のみ。

またその『日露戰爭觀』には次のやうに書いてある。

更に飜つて士官に向つて何が故に戰爭に臨むかと質せば、彼は必ず自分が軍人であること、及び軍人が祖國防備に缺く可からざるもので有るからと答へるであらう、若しそれ殺戮が基督教の精神『殺す勿れ』に悖ると云ふが如きものは彼(士官)の意に介せざる所、彼は斯くの如き教訓の法則を信ぜず、たとへ信じたとしてもそれは法則そのものを信ずるのではなくて、唯その法則に對する一種の解釋を信ずるのみである。

是はトルストイが『解す可からず』主義の一例である。

聖書に「汝等の敵を愛しみ、汝等を呪ふ者を祝し、汝等を憎むものを善視し、なやめ、迫むるものゝために祈禱せよ』とあるに對して曰く、

汝の敵を愛せよ――、これ果して人の能くすべき所であらうか、誰か此の偉大

なる思想を疑ふ者があらう、然もこれ達し難きの道徳的理想である、吾人恐らくはわが敵を害せんとするの念を制するを得ん、然れどもこれを愛するは到底克くせざる所である――余は敵なる文字の意義を研究した、然して此の字は殆んど凡ての場合に於て個人的なる仇敵をさすことなく『敵國民』を指すものなることを知つた、かくて余は隣と敵とを以て同國民と敵國民を意味するものだと解釋して余の疑問は始めて氷解した（我宗教一六頁――一一九）

これはその解釋の例であるか、是は明白なる獨斷である。彼の言ふ所は成る程一理ある、然し彼の解釋は誤謬である。

彼の此の解釋を待つまでもなく聖書は自らこれを解して『呪ふ者、憎む者、迫むるもの』と言つてゐる、これ明白なる個人的の意味の敵である。

彼が自分自身の意見を基礎として獨斷的聖書を解釋したことはこれを見ても分るであらう。

何を トルストイは 知るか 度論の 無知 なること

彼は又『日露戰爭觀』七十四頁に次の如く言ふてゐる。

汝の敵を愛せよ、然らば汝に一人の敵なかる可しとは基督がその十二使徒に教へたる言葉である。

是はその竄入の例である、基督の語には『汝の敵を愛せよ』とはあるが、『然らば汝に一人の敵もなかるべし』とは書いてない、この數語は彼の竄入した言葉である。

聖書はもとより斯くの如き言葉の竄入をゆるさぬ、敵を愛せば一人の敵なしとは言はれぬ、基督は敵を愛せよとは教へたが、それは一人の敵もないための態度であれとは教へなかつた。

若し敵を愛するが故に一人の敵もないならば、基督は十字架につけられなくも濟んだ筈である、ステパノは石にて打ち殺されなくもよい譯である。

否、基督やステパノは敵を愛さなかつたものであるといふ論理もなり立つ、むしろパウロの『われ愈々汝等を愛すれば愈々汝等に愛せられず』と言つたことが眞理

であるべく思はれるではないか、是れ卽ち聖書は斯の如き竄入を許さないからで有る。

さてイエス、聖靈に導かれ惡魔に試みられんが爲に野にゆけり、四十日四十夜食ふことをせず後餓えたり、試むる者彼に來りて曰ひけるは汝若し神の子ならば命じて此石をパンとせよ、イエス答へけるは人はパンのみにて生ける者にあらず、唯神の口より出づる凡の言に因ると錄されたり。

と、馬太傳第四章にあるのを、彼れトルストイは『我宗教』二百二十一頁には、聖靈といふ文字を拔き、惡魔を誤謬と改め、四十日四十夜食ふことをせずと云ふ一節を削り、神の道と人の理性とを同じものとしてゐる、卽ち

さてイエス野に退きて誤謬の誘惑に逢ふ、誤謬曰く汝若し石を變じてパンとなすこと能はざれば汝は神の子にあらず、イエス曰く人は唯パンのみにて生くる者にあらず、神の道に依りて活くる也、我れ石よりパンを得る能はざれども我裏にある理性によりて能くパンに對する慾望を制するを得ん。

とあるのはその添削の一例である。又馬太傳第五章の三十二節

姦淫の故ならで其妻を出すものはこれに姦淫をなさしむるなり。

とあるのを、彼は

人其妻を出す者は放蕩の罪の外に女をして姦淫をなさしむるなり。

と、『我宗教』に說いてある。

是は彼の聖書改譯である、然して彼が斯の如く改譯するに至つた動機は、基督の道は嚴格なる離婚禁斷の敎であつて貞操を破つた婦人であつても、決して是を去ること能はずといふ主我的獨斷に根ざしたのである。

然して彼が斯の如く改譯したのはギリシャ語と英語との解釋上の多少の相違を理由とするのである。

以上述ぶるが如くトルストイの病根は思考的利己主義である、聖書の解釋も改譯

も、添削もすべてみな彼の獨斷に基づくのである。

彼の主義、彼の思想、それらのすべては彼の基督教に對する獨斷的考察を出發點として論ぜられねばならないのである。

此の聖書の一面觀から彼の無抵抗主義は生れ、非裁判論も出來、非戰論、無政府主義も唱へられたのである。

然して世界の上に無數の崇拜者を出したのである。

だが、然し、前にも言ふ如く、彼の聖書解釋は獨斷的であつただけに、彼の無抵抗主義、彼の非裁判論、彼の非戰論、無政府主義にも多少の獨斷的誤謬のあつたことは免かれない。

然り多くの誤謬のあることを發見するに難くはない、然も尙ほ彼の偉大なるはその獨斷を獨斷と氣付かなかつた點にある、彼自らは然く信じてゐた點にある。彼の大なるは自ら信ずることの大なる點である。

三　トルストイの無抵抗主義

彼の無抵抗主義は、聖書に立脚地を有することは勿論である、基督教の聖書は馬太傳の五章、三十八節より四十二節までにイエスの無抵抗主義を說いて、

目にて眼を償ひ齒にて齒を償のへと有るは汝等が聞く所也、然れどもわれ汝等に告げん、惡に敵する勿れ、人汝の右の頰を打たば又他の頰を轉じてこれに向けよ、汝を訴へて裏衣をとらんとする者には外衣をも亦取らせよ、人、汝に一里の公役を强なば之と偕に二里ゆけ、汝に求むる者には與へ借らんとする者を退くるなかれ。

とある、これは基督の金誡である、惡に敵する勿れと云ふ無抵抗主義は必ずしもトルストイの發明ではない、基督の創唱である。

唯ルーテルが『義人は信仰に依りて生く』と十七世紀に絕叫してその宗教改革の

大偉業をなしたるが如く、トルストイは十九世紀の後半世に於て『惡に敵する勿れ』の聖句を絶叫して基督の教を宣傳した功は偉大である。

基督の無抵抗主義がトルストイの聲に依つて歐洲全土を震撼せしめたことは沒す能はざる所の功であつて何人も否定することは出來ない。

然しながら基督の無抵抗主義は一面に於てはトルストイの無抵抗主義と一致するけれども、他の一面に於ては明らかに相反する所がある、基督の無抵抗はトルストイが說けるが如く、

『是を忍べ、是に從へ』

と言ふのである。

故に基督の無抵抗は徹上徹下惡に服從することである。然るにトルストイはその著書に於て、

身を殺して魂を殺すこと能はざる者を恐るゝ勿れ、唯汝等が魂と身とを地獄に亡ぼし得る者を恐れよとの教訓を、深く心に刻みて忘れざれば、あらゆる服從より自由である、彼等は他人の暴行には耐えられるが然し心は毅然として高い人道に外れた他の命には從はないであらう。

基督教は壓制に耐えよといふ、然し服從せよとは言はず。

と論じてゐる。卽ち忍耐と服從とを區別したのである、然し忍耐と服從とは元來一であつて二ではない「內面の忍耐が外面の服從」と現はれるのみである、忍耐なき服從の有り能はぬが如く、服從の伴はざる忍耐はない。

此の二つは要するに一事實の兩面であつて分つ可きものではない、壓制に耐ふるこれが卽ち服從である、服從なき忍耐の具體的事實を示し得られぬ外は、人は服從と忍耐とを別々に考へることは出來ぬ、彼は又次の如く言つてゐる。

凡そ眞の基督教徒は明瞭に兵士たることを拒絕せんとす、未だ此の拒絕を行ひたる者は千人中の一人に過ぎざるが此の行爲が社會に及ぼす勢力は非常にて

昧者も是に依つて神の敎と政府の命との間に甚しき矛盾あるを見、良心の自由を求むるの念盛なるに至つた。

茲に至つては服從でもない、忍耐でもない、將に抵抗である、彼の說く所の無抵抗主義の底には一種の力强い抵抗の存在してゐることを知らねばならぬ。基督はその聖書に敎へて曰く、

『人若し汝等に一里の公役を强いなば彼と共に二里行け』

トルストイは卽ち是を評して是は軍事にあらざる別種の公役ならんと言つてるが、原語は十分に軍事上の强行命令を意味してゐる、彼が是を知らぬ筈はない、然し是を言はぬのは彼の無抵抗と云ふのは一種異色のあるものであることが分る。

例に引いた一文に依れば軍事上の公課に限つては無抵抗ならざるも可なるやに說いてあるが、そこがトルストイの非戰論の根據のあるところで、彼の無抵抗が純なる意味でない理由でもある、底に抵抗力を有する無抵抗である。

これは單に軍事上のことのみでなく、他の場合に於ても亦考へらる可きトルストイ其人の特長であると言つてもよいのだ。

四　トルストイの裁判論

トルストイは亦非裁判論者である、然して又彼の此の論據はやはり基督敎の聖書に置かれてあることも言ふ迄もない、馬太傳の第七章には

人を審判く勿れ、恐らくは汝等も亦審判かれん

とある、彼の非裁判論の根據はこの一節にあるのだ。

然し、同じ馬太傳第十九章に於ては、基督は裁判權を認めてゐる、卽ち次の如くである、曰く、

世革り人の子榮光の位に坐する時、汝等も亦十二の位に坐してイスラエルの十二の家族を審判く可し。

だが然し、トルストイは彼自身の獨斷を確定せんが爲めに、パウロの羅馬書二章一節の句を引用してゐる、それに依れば、

是故に人を審判くところの人よ、汝等言ひ逃る可きなし、汝他人を審判くは正しく己れの罪を定むるなり、そは審判くところの汝も亦同じくこれを行へばなり。

然も同じ羅馬書に於てパウロは國家と其裁判權とを認識してゐる、即ち

上に在りて權を掌る者は凡て人に從ふ可し、けだし神より出でざる權なく、凡てある所の權は神の立て給ふ所なれば也、是故に權に逆らう者は神の定めに逆ふなり、逆く者は自らその審判を受く可し、彼は汝に益せん爲の神の僕なり若し惡を行はゞ懼れよ、彼は徒らに刀を操す、神の僕たれば惡を行ふ者に怒を以て報ゆる者なり。

と言つてる。

彼の非裁判論はその根據とする諸書の後章に於て覆へされて居るかの感がある。勿論パウロはすべての國家を認識したのではない、唯認めて基督教的國家といふやうなものであつたかも知れぬ。

だからトルストイが非裁判論を確立しやうとするには、是が順序として先づ聖書の土臺の上に非國家主義の大原理を建設してから、論據を立てるのでなければ完全なる非裁判論と云ふことは出來ない。

然るに聖書は極めて狹き範圍に於て國家を認識してゐるから、トルストイの裁判論は聖書を對象としていふときは、所謂砂上の家たるの感があるのみならず、家そのものさへも實在ではないかに觀測されるので有る。

然らば聖書の『審判くなかれ』といふのは何の意味であるかと言へば、是は基督を生んだユダヤの國體を根據として解釋せねばならぬ。

當時のユダヤ人はサントヘリムの議會と稱して最高裁判權を執行する大審院を有

してゐた、その議員たるものはユダヤ人の首長として委するに裁判權を以てした。

基督その人の死刑も豫じめこの議會に於て裁定された、此の議會の議員の外一般の人民も亦此議會に對して罪を定むるに就ての發言權を有つてゐた。

基督教の聖書に　審判くなかれ　とあるのは此の一般の人民に對して言つたので裁判權を委任せられたサンヘトリムの議員に對してゞはない、その一例として奸淫して捕へられた女の審判に就て約翰傳八章に面白い事實が記されてゐる。

爰に奸淫して捕へられし女ありしが學者とパリサイの人之をイエスの所に曳き來り群集の中に置きて言ひけるは『師よ此の女は奸淫をなしをる時其儘捕はれしものなり、斯くの如き者を石にて打ち殺すべしとモウセは律法の中に命じたり、汝は如何に思ふや、イエス答へず、地に物書けり、人々重ねて言ひければイエス曰く『汝等の内罪なき者先づ石にてこれを擊つべし』とイエスは罪なき者審判く可しと言ふたのである、審判く可からずとは言はなかつた。罪なき者は人を審く可しと言ふたのである。

否、罪なき者でなくては人を審判くことは出來ぬと言つたので、決して審判そのものを否定したのではない。

然し此の約翰傳の一節は批評を加へた新約から除かれたものであるけれども、初代基督教徒の基督教的意識の記述として觀るべき事實を拒否することは出來ない。

五　トルストイの非戰論

有名な非戰論、トルストイのその偉大さを裏書する非戰論も、根據は實に聖書の一節にある、卽ち馬太傳の五章に

殺す勿れ、殺すものは審判に預からん。

と、あるのがその論據であると言つてもよろしい、但し茲にはその非戰論の趣旨に就ては餘り多くを述べたくない。

この一句はモウセの律法の一個條であつて、同じ律法、または他の個條に於て、

人を打ちて死なしめたる者は必ず殺さる可し（出埃及記）

と言ふのも同じ意味である、此等の律法の意義は甚だ明瞭である、殺す勿れと云ふのは禁である、誡である。

然してこれと反對の『殺すべし』と云ふのは刑罰又は義罰である、此の刑罰、この義罰は新約中にも尙ほ生命を保てること前章明示の如くであるから、前章說く可く國家を認め、國家の裁判權を認める以上、一面戰爭も認めねばならぬことになる殺すのが目的ではなくて、義罰が目的である、罪に對する刑罰が目的である、卽ち個人の罪惡が法律に依つて道德に依つて罰せられるごとく、國家の罪惡は關係國家の義戰に依つて罰せられねばならぬ。

殺す勿れの一語を以て非戰論の根據とすることは例に依つて一面の眞理をのみ認むるに急であつたトルストイの獨斷論である。

かつ、人汝等に一里の公役を强いなば是と共に二里往けと云ふ此の公役が、軍事上の使命を果すためのものであるにも拘はらず、此の本文を無抵抗主義の根據として居りながら、非戰論者なるが故に從軍を拒絕し奬勵するトルストイの態度は撞着と矛盾とがあると言はねばならぬ。

六　トルストイの國家觀

トルストイの非戰非、非戰爭主義は、やがて非國家觀となつて現はれる、然してその提唱した無政府主義が晩年に於て具體に現はれたのも妙である、彼は其の著『時代末』に於て國家を論じて、

無道なる軍備と戰爭、及び人民より土地を掠奪せしことは基督敎國全體に起らんとする革命の原因なること、予の反覆して言ふ所也、現今の政治組織より利益を受くる上流の人士は政治機關なくしては人の生存し能はざることを說く、

然れども國家の重味に壓せらるゝ下流の人々に聞け、一億の露國農民に國家の要を訊け、彼等はたゞそれを以て堪え難き重荷となすのみにて却つて斯の如き者の存在を希はざらん。

自國の國情を歎き、是を救濟せんとするために無政府主義を說くに至つた露國の事情には吾人同情に堪えない、然り此の横暴にして壓制多き基督教國、その名あつて實なき基督教國の迫害を免かるゝ方便として無政府主義を提唱したトルストイの心情は同情には價するが共鳴はなし得られない、その無政府主義が果して天下の民を國家の厄より救ひ得るか否かは疑問である。

無政府主義とは何であるか、讀んで字の如く國家から政府の力を取り去ることである。

然れども今日政府を戴いて居る一切の國家から、如何にして此の政府と云ふ頑臘を切り棄てることが出來やうか、彼は

人間が天賦の自由の意識を生じ良心に違背せる行爲は斷じて爲さずと決したらば人爲的結合卽ち國家組織は破るゝなり。

と言つてる。然し斯くの如き方法は迂濶である。實際に何等の力もない。基督教徒は三千年來切々孜々力を盡し生命を盡して努力してゐるが、然も歐米に尙ほ人爲的結合が存在してゐるではないか、彼の謂ふところの暴惡なる基督教國が存在してゐるではないか。

若しトルストイの言ふ如く『人間が良心に違反せることは斷じて爲さず』と決心してその決心がしかく力のあるものならば、歐米の基督教國の基督教徒はいづれも一度その教會でバプテスマを受けたときに決心した筈である。

然もその決心を忘れ、良心に背いて基督教國を結合してゐるのは何であるか、觀じ來ればトルストイの無政府主義と云ふものは無策無爲、唯一片の理想、若くは空想にすぎないのである。

彼の無政府主義はかくの如く迂濶なるのみならず、彼は毫も天下の大勢に通じない、彼が良心主義、合理主義を説いてゐるのと同時代に、彼の隣國ではニイチエが頻りに殺盜主義の進軍ラッパを吹いてこれを威喝し、進化論者は團體主義をプロパカンダして『敵國民を愛せよ』と云ふ彼の主張を破壞しやうとしてゐるのだが、彼は少しもそれに氣づかなかつた。彼は恰かも世の變移を知らざる田舍翁の如くである。

彼の無政府主義は十四世紀以前に於て說かる可きものであつたので有る。

七　トルストイと露國

飜つて露西亞の現狀を見よ、無政府主義者としての彼を生んだ露西亞は、現に彼の主張した如く歐洲大戰中、ザアの國家が倒れて、レニン、トロッキーの政府となつて、恰かも無政府の狀態ではないか、その無政府の露國民は決して彼の理想した

る如く幸福を感じてはゐない。

勿論レニンの共產主義と、トルストイの無政府主義とは幾分の相違はあるであらう、然しともかくも彼の無政府主義に近いものは現代の露西亞である、彼の嫌つた基督敎的國家の倒れたのが今の露西亞である。

彼はこの現狀を見て何といふであらうか、惜むらくは彼死して知るによしないが或は恐る、彼は又國家主義を提唱するやうに變化しはせなかつたで有らうかを。

無抵抗より起つて無政府に終つたトルストイの思想は、要するに一片の理想である。

現在露國の狀態を考察すればむしろ空想に近いとも言へる、彼は實に理想家、若くは空想家である、卽ち詩人である。

ヤスナヤポリヤナの貴族トルストイの平民主義や宗敎信仰が詩の範圍を脫しなかつたのはけだし無理ではない。

私の序論は餘りに長きに過ぎたかも知れない、然し、トルストイを研究し、トルストイの思想に就て何等かの啓示を得やうとするものは、大體トルストイの人物に就て知つて居らねばならぬと思ふので如上說いた次第である。

然し、以上說くところは、ドルストイの所說の駁論になつたやうである。

トルストイの崇拜者は多い、日本にも、歐米諸國にも數限りもなく多い、數多いトルストイ崇拜者からはトルストイ崇拜論を聞くばかりであるから、讀者諸氏はその半面のみしか知り得ざる恨みがある。

依つて譯者はその兩面を併せ知つて、眞實のトルストイの面目を諸君に彷彿たらしめやうと思つて、敢てトルストイの駁論を書いた次第である。

以下、第二章より順次記述するのは卽ちトルストイ伯の「貧しき者は幸也」の論である。

たゞ然し茲に特におことわりして置くのは、以下の各章が必ずしも連續的系統的のものではなくて、トルストイの所論のうちから、その要點をぬいて結局『貧しき者は幸福也』の結論に到達した論文集の編纂であることである。

前述の如く、トルストイは偉大であつたかはりに、缺點も多かつた人である、然してその說く所、論ずるところも、自家撞着になり、獨斷に傾むいてゐる結果、前日の所說と後日の所論が、その時々の感興と思想とを主とした爲に、往々脈絡を缺き矛盾した點が無いとも限らぬ、故を以て、特にさうした矛盾を避けて統一をあらしめるために、或はその一部分を除いた所もある、幸に讀者の諒察を希ふ次第である。

第二章　社會論

一　社會組織の事實

一體人類といふものは其の本然の性質上、孤立して生存を續けて行く可きものであるか、又は群居して國家を造つて其生存を全うすべきもので有らうか、これにはいろ〳〵の說が有つて、今日の國家組織、社會組織に疑問を抱く者は少くない模樣である。

然しながら疑問はしばらく疑問として置くがよい、今日の如く人類が群居して風俗を同じうし、習慣を同じうし、言語を同じうするものが一團となつて國民的國家を形造つてゐると云ふことは少くとも事實である。

それが人類本然の目的であるか否かは問ふところではない、それはわれ〳〵の目に見、耳に聞くところの嚴然たる事實である。

然してわれ〳〵も亦此の國家組織、社會組織の事實の上に生活する以上は、一切の問題は此の團體的組織を基礎とし立脚地として論ぜねばならぬ。

よしこの團體的組織が神の目から見て必ずしも正鵠必善のものでないとしても、事實は事實として論ぜられねばならぬと思ふ。

その事實、卽ち人類が國家的組織、社會的組織を形成したのは、どんな心理狀態に基づくかと言へば、人間と云ふものは肩身が廣いことを望むものだ、くだけて言へば何所へ行つても幅のきくことを望むといふ氣持が付き纏ふものだ。

然るに人間は、今日の時代に於ては若し國家を形成してゐなければ肩身を廣くしたり巾を利かしたりすることが出來ぬ、情ない話だ。

萬物の靈長たる人間が團體的組織に依らねば人間自身の肩身を廣くすることが出來ぬといふのだから、情ないことではあるが、それは現在の事實であるから致し方

はない。

金錢といふことは人間が一番最初に考へて且つ是を尊ぶものゝ一つである。千萬圓か一億圓もあれば地球の何所の果まで行つても構はない、何所の國籍に入れられても構はないと云ふやうに一寸考へられる、所が左樣でない事實がある。

歐洲の諸方に散在するある國人、彼等は數百萬乃至數千萬の富を有してゐる者は少くはない。

然るに彼等は何所のホテルへ行つても具合が惡い、何所の食卓に座つても皆いやがれるやうだ、故にいくら金を多く持つてゐても心持よく使用することが出來ぬ、そこで彼等は或は獨逸人、或は英國人、或は米人と稱してその肩身を廣くしやうとして居る。

彼等には今日の所謂本籍がない、國籍がない、實際目に見て憫む可き感じがする本國といふものは今の社會組織に於ては何うしても無ければならぬ、是はおれの國だ、おれは英人だ、俺は露西亞人だといつて本國のグレースを誇り、かつ人からも尊敬されることは愉快であるに相違ない。

將來、何億年の將來に於て理想の世界が現出したら知らぬこと、現在及び少くとも近き將來に於ては斯くの如きことが現存してゐる、各國家が兵力を大にし、富を增進しやうとしてゐるのは卽ち、此の意味に外ならないのである。

卽ち自國人の肩身を廣くしやう、自國の富强を計らうとする意味に外ならないのである。

是れ卽ち世界各國の現狀であつて、又これを人類各個々についても考へられる。

二　帝國主義と社會政策

世界の各國が銘々自己の國の隆盛と富强とに腐心しつゝ有ることは、既に前節にも述べたが此力の外側に現はれる形は卽ち帝國主義である、內側に働く形は卽ち社

會政策である。

それが善であるか、惡であるか、その批評はせぬ、とにも角にも事實として世界の各國に行はれてゐる。

自國をして隆盛富强ならしめる、これが立國の基礎である、萬事が此の方針から割り出される。

卽ち國民が結束して一國を作れば、先づこれを統卒する所の君主を立てねばならぬ。

次には國家富强の基をなすところの國民を要する、各個の國民はみな物の役に立つやうにならねば成らぬ、それには何うしたらよいかと言へば敎育の力に待たねばならぬ。

各個人は學問をさせれば學問が出來るやうになる、算盤を習はせればよく算盤が出來るわけである。

鐵砲を擔がせればそれも上手に出來ねばならぬ、ところが學問もよく出來、算盤も相當にやり、鐵砲も上手に擔ぐと云ふことは素より生れつきでもあらうけれども身分が丈夫で、頭腦が明敏でなければならぬ。

然して物事に忍耐し得るものであることも必要である、さう言ふ人が一人でも多いことが望ましい。

ところが茲に困るのは貧民である、身體は營養不良である、思想はひがんでゐる實際貧民の多數は身體もわるく頭腦もよくない、其所でこれを何うかして役に立つ國民にしなければならぬ。

然し茲にいふ貧民とは極貧にして自立の出來ない最下層の者で勞働者や農夫のことではない。

もう一つ困るものがある、それは金持の子であると思ふ、これも身體が弱くて頭腦もよくは無い。

英國は何人も知つてる如く、國が富み且つ富豪貴族が多い所である、然るに今日に至るまで尙ほ國の土臺がしつかりして居る、これは何故であるかと言ふと貴族富豪の子弟の教育に對する注意がよく行き屆いてゐる、觀念がしつかりして居る、實際英國の富豪貴族の子弟は身體も惡くはなく頭腦も明敏なのが多い、これは運動もやれば衞生にも注意するからだ。

と言つて英國にも貧民もある、此の下等社會の貧民は血色も惡く體格もよくはない。

然も英國が世界の强國として威張つてるのは何故か、かつてローマ帝國も大に隆盛だつた時代もあつたが忽ちにして衰微した、これは富强を恃んで奢侈に流れたからである。

然るに英國では奢侈を誡しめるやう、教育の力を以て注意してゐる、故に世界の强國と言はれるやうになつて、然も今日尙その聲價を維持してゐるのである、尙ほますく進歩してゆくかも知れぬ。

三　富の分配

だが然し、英國のやうに富豪貴族を物の役に立つやうにするのも國家にとつては必要なことには相違ない。

然し、何よりも緊急大切なことは貧民の方向を善導することである、社會政策の主として目的とするのは實に貧民の方向である。

言ひ換へれば社會政策の主なる目的はなる可く貧民を少くすることにある、卽ち成る可く富の分配を公平ならしめるのである。

貧民は益々貧に、富豪は愈々富むと云ふやうな不公平をなからしめる事が必要である、富の均衡を保つやうにしなければならぬ。

其の方法としては產業組合といふやうなものも必要であり、勤儉貯蓄の思想を涵

養することも大切であらう、國家としてはさういふ施設をせねばなるまい、獨立自治の思想を吹き込むのである。勉勵努力の氣風を吹き込むのである。

又或は教育を普及せしめる、そして生活の向上、思想の堅實を促進する、或は田園生活を誘導する、郊外生活を奬勵する、そして新鮮の空氣の中に清淨な生活を營ましめる。

又圖書館、基督教會と云ふやうなものも必要である、上水下水の設備を完全にして衛生につとめる、交通機關をこしらへる、教育制度を普及する、これに國家が干與して實行せしむるのが社會政策である。

一歩進んでは土地の私有を禁止する、財産私有の程度を限定することも必要だ。いかに社會政策を實行しても國民個々の富の懸隔が甚だしかつたりして富の均衡を保ち難いやうな狀態では駄目だ。

社會政策の根本は一國を以て、家として、世界を以て同胞とする愛の教に依らねばならぬ。

自分の國に、自分の住んでゐる世界、それをお互に理想に近づけやうとする所に社會政策の妙諦がある。

その理想境に近づくのは國民各自が自覺せねばならぬ、國家そのものが自覺せねばならぬ、否、人類すべてが自覺せねばならぬ、さうして人文窮局の發達を圖らねばならないので有る。

然し、各國民は互に他國民を冒さうとしてゐる、内に社會政策を施すのは、外に向つて侵略主義を實行しやうとする爲めの準備的行爲なのである、尠くとも既成國家に於てはそれが實である。

四　社會と貧民

成る可く富の分配を公平ならしめ、なる可く一私人の所有を限定する、卽ち貧民

を少からしめることが既成國家の社會政策であるとは前にも述べた。

それをもつと一般的に押しひろめれば所謂共產主義、社會主義と云ふやうなものになるのである。

だから國家に於ける社會政策は外にむかつて帝國主義となり、世界的に見たる社會主義と全然その目的を異にするのは不可思議な現象である。

國家社會主義と云ふやうなものも出來た、それは既成國家と云ふものを認めて、その國家內に於て徹底したる社會政策を實施しやうとするのである、然しこれは到底言ふ可くして行はれまい。

いかにも世の中には貧民が多い、國家は社會政策の實行に汲々としてゐる、富を公平ならしめやうとして居る、それにも拘はらず富は中々思ふやうに公平に各人に分配されない、何時まで經つても所有權のバランスはとれない。

三千年の昔、基督がユダヤの野に說いたのも實質的には富の分配である、爾來、何人かの豫言者がこれを裏書してゐる。

然して是を信ずる國民は多い、然し乍らその多い國民が決して富の公平なる分配を受けてはゐない。

口に富の公平なる分配を說いても實際にそれを行ふことを欲せぬものもある、時代が惡いのか、人が惡いのか。

そも〳〵亦、富は永遠に公平には分配されぬもので有らうか、此の世のあらん限り、貧民は盡きぬものであらうか。

富の公平が保たれ、貧人も富人もなく、權力も金力もなく戰爭も爭鬪もなく各人同樣に現在生活を樂しみ得るところの平和と幸福とは果して人類の將來には望み得られない所であらうか。

五　社會制度の缺陷

前述の如き貧富の區別は何うして永遠に除却されぬかと云ふと、種々の理由もあらうが要するに社會制度の缺陷と云ふことに基因するのである。

過去もさうであるが、現在我々の經驗してゐる社會制度には不合理なことが非常に多いのである。

一方には現行制度上の關係から偶然權力階級に置かれたが爲めに、何も人類文化の發展向上に貢献すべき能力も素質も有たぬ者が徒らに遊惰安逸な日を送つてゐるのに、一方同じく現行制度上の關係から偶然非權力階級に置かれた爲めに、文化向上のために多くの貢献をなし得べき素質を有しながら當面焦眉の問題の生活の壓迫を蒙むつて貴重な天分を發揮することも出來ずその儘僻陬の地に埋沒してしまふ者がどの位あるか知れない。

貧富の別と云ふのもちようどそんな理屈から生じたので有る、つまり勞働と報酬に關する不合理な不權衡な制度や、不穩當な法律が生んだ結果である。

貧富と云ふやうな物質的の問題を別にして、若し大きな目から見て人類の文化的向上と云ふことを土臺として考へるならば、斯やうな人物的不公平を齎らすところの、現代社會組織は大に改造せねばならぬ必要が有る。

そうした社會組織の不備のためにどれだけ一般人類の福祉、乃至その文化的發展が阻害されるで有らうかこれは決して輕々に看過し能はざる事實である。

斯う云ふ社會的缺陷は、人間の幸福を期する上に於ても。その貧富の別を少くして富を公平に分配することに於ても、勿論一刻も早く除去せねばならぬことでもあり、又それは社會制度の改造に依つて大體はこれを拂拭し去ることが出來るであらう。

然しながらこれを人類永遠の幸福・人類文化の發展と云ふやうな精神的方面から考へると、一部の經濟學者や、社會改造家の考へてるやうに、果して人類の一般的幸福と平和とが望ましるか否か、それは餘程疑はしい、否、それは恐らく不可能で

はないかと思はれる。

いくら社會制度の改造に依つて一般の經濟狀態が良好になる、卽ち富が公平に分配されたとしても、世の中には動物性の人が現に多いのであるから、他人を苦しめて自分だけ樂まうとか、或はまた隣人同志の幸福を犧牲にしても自分だけは不當の利益を得やうとか、そう云ふ事を始終考へてる人が出ないとも限らぬ、これでは決して眞の平和や幸福は望まれない。

そして又さういふ頭腦の持主ばかりであつたら改造した新しい社會制度の維持さへも困難だと云ふことになるのでは無いか。

然して忽ち社會進化の進路が逆轉して再びもとのやうな邪路に入るのでは有るまいか。

さうなると、少くとも社會制度の改造と共に人類その物の改造、卽ち人間は經濟的ばかりでなく、精神的にも改造されねばならぬと云ふことになる、要するに社會改造に伴ふ人間の精神修養である、否、精神修養がむしろ重大でもあり、且つ先驅であるかも知れぬ。

勿論、人間の心の中には動物性と神性とがある、其の動物性を最少限度に縱少し神性を最大限度に擴大することが人間の理想であり、又少しでも理想に近づくことがとりも直さず人間の幸福を增進せしむる理由でもある。

この意義深き目的が經濟的にのみ見た富の公平なる分配に依つて完全に達せられやうとは思はれない。

勿論經濟組織の改善も斯やうな目的を助成する一つの力ではあるが、その全部ではないことも言ふ迄も無い。

第三章　貧富論

一　基督の獅子吼

社會組織の改造に伴ふ人間の精祈的修養に就ては後章更に述べたいと思ふが、社會組織の缺陷から本來平等なるべき人間に貧富の區別がある、それのみではない、富む可き素質を以て生れたものでも社會上の先天的位地のために富を得ること能はざる者もあり、愚鈍な低能者で尙ほかつ富を先天的に享有して安樂に暮してゐるものもある、何と云ふ不公平な社會であらう。

然も富める者はその心惡しく、その人格低きも尙は貧しく善き人よりも幸福に暮してゐる、これは何故であらう。

世の多くの人は富める者は貧しき者よりも幸福であると思つてゐる、富の公平なる分配と云ふことも此所に出發點の一つを置く、然り、物質的、經濟的には富めるものは貧しき者より幸福であることは神といへども尙ほこれを認識しない譯には行かぬ。

前にも說いた如く、社會改良家や經濟學者は、富の分配を以て人間に幸不幸をなからしめやうとして居る。

然るに基督は、貧富の差別を見ず、從つて差別の依つて來る社會組織の缺陷をも說かず、直截に簡明に、その根本に迫つた、卽ち馬太傳山上の敎訓の一節に、

『貧しき者は幸福也』

と、說いたのがそれで有る。

基督は貧富の差別を說かず、社會組織の缺陷を呪はず、富の分配をも提唱せず、貧富の差別觀に囚はれた人間の心の改造を說いた、そして貧しき者は幸福であると喝破した。

人間の精神的修養を説いて貧富觀の論據を改造しやうとしたのである。あゝ、果して貧しき者は幸福か。

二　貧しき者は幸福か

『貧しき者は幸福也』

一語、甚だ簡明である、何の裝飾もない、何の虛榮もない、何の誇張もない、甚だ簡單であるが然しながら又甚だ明瞭である。

是は一讀甚だ奇怪なる言葉である、普通一般の常識を以ては圖り知ることの出來ぬ語であらねばならぬ。

何故に貧しき者が幸福であらうか。

見よ、貧しき者は飽くまで美食することが出來ぬ、貧しき者は人目を欲だてしめる美衣を着することは出來ない、大層高樓に住ふことも勿論出來ない。

日々夜々、あくせく働かねばならぬ、寒いからと言つて炬燵にのみ當つてゐる譯には行かぬ、暑いからと言つて暑を海濱に避けることも出來ねば山野を旅行することも出來ない。

啻に、それのみではない、子供に欲しいものも買つてやれぬかもしれぬ、時には自から飢えるやうなことが無いとも限らぬ、これで果して何所に幸福があるか。

どう考へても貧しい者は幸福ではないやうに考へられる、まつたく陋巷に食ふや食はずに、おんぼろ〳〵を引きずつてゐる乞食、日がな毎日人に食を乞ふて生命をつないでゐる乞食、それが果して幸福であらうか。

世の中に何が貧しいといつて乞食ほど貧しい者はあるまい、住むに家なく食ふに食なく着るに衣なき乞食はいかに貧しき者であるか。

然し、何人も乞食にむかつて、

『世の中にお前ほど幸福なものは無いぞよ』

と言ふものはないやうだ、その乞食自身にしてもが
『わたしほど世の中に幸福なものはありません』
と公言するものはない、第一幸福ならば何も人に食を乞はなくもいゝ譯だ。乞食なんかしなくてもいゝ譯だと言ひたくなる。
だが然し、此の世の中で一番貧しい乞食が幸福でないとすれば、キルストの言つたやうに、
『貧しき者は幸福也』
と言ふことは有りうべからざる事である。
然しキリストも世界の大偉人だ、洋の東西をとはず時の古今を論せず、大分信者も多い。
それほどの大偉人たるキリストがいゝ加減な出たらめを言ふわけはないと思ふが事實は必ずしもキリストの言の如くで無いのは如何した譯だ、眞理の宗教だといふ愛の宗教だといふ、その基督教のプロパカンダーたるキリストが辻褄の合はぬことを言ふ譯はない。
然り、貧しき者は幸福である、幸福は貧しきものゝ所有する唯一の寶である、一讀甚だ奇怪なるが如く、再讀甚だ當然なる此の言葉について、われ〳〵は少し愼重に考へて見たい、これ豈、われ〳〵自身のためのみならんやである。

三　貧富の差別は如何

貧しき者は幸福也といふ一語を解釋せんとするに當つて、われ〳〵は先づ第一に貧とはそも〳〵何を意味するかに就て、何等かの答案を得なければならぬ。
然り、貧とは何か。
貧しい、乏しい、小さい、尠い、何れも同じ意味と見てよろしい、百萬圓の長者に比しては五十萬圓の富豪は尙ほかつ貧乏人であることを免かれぬ、百圓の月給取

に比しては日給二圓の職工は貧的であることは言ふまでもない、賣上高一日五十圓ある小賣商人より取引高一日何千圓を數ふる卸商は富みて且つ豐かである、三十七八貫の體量ある角力取に比しては十貫内外の女子供は甚しく體量的に貧であると言はねばならぬ。

平均身長五尺五六寸の歐米人に比しては、日本人の五尺一二寸は甚しく貧弱である。

百萬圓の資本を有する會社は五千萬圓の會社よりも、大に貧しく乏しい。

明白に言へば少は大よりも貧に、無は有よりも貧である。貧とは卽ち無、若くは少の謂であるかに觀せらる。

だが然し、東洋の俚諺に貧乏人の子澤山と云ふことがある。

子供が一人より二人、若しくは三人四人あつた方が貧乏者であるとの謂だ、さうだ、人間一人の生活費はたいがい決つてる、一人の生活費よりも二人の生活費の方が多く要するものとすれば、一人の子を持つ者よりは三人五人の子を持つ者が生活費も多くかゝり、從つて金の支出も多いからそれだけ貧乏だと云ふことにもなる。

斯う考へて來ると此の場合、少は多よりも富めりと言ふことになる、多數が少數より貧乏だと云ふ理屈になる、是はちと怪しくなつて來たものだ。

して見ると、少は大よりも貧乏だとは言へないことになる、無は有より貧的だとは稱されない理屈だ。

然らば卽ち貧とはそも〳〵何を言ふのであるか、同じく東洋の語に稼ぐに追ひつく貧乏なしと言ふことがある、然らば稼ぐもの、始終汗水流してあくせくと働いてゐるものは貧乏が追ひ付かぬから、富めるものだと言ひ得られる、然しながら事實は果して如何か。

所謂勞働者を見よ、農夫――ことに小作農を見よ、彼等は終日營々と稼いでゐる朝に霜を踏んで仕事につき、夕に星を頂いて仕事の手をやめる、それほどに一生懸

命稼ぎながら、彼等は尙貧乏から逃がれることは出來ない、彼等の足許にはいつも貧乏が追つかけて來てゐる。

彼等は妻子をすら養ひ得ない、夫婦親子共稼ぎをして然して尙貧乏である、暗くおきて野良に出で暗くなつて家に歸る程に稼いでも、尙その小作料が納まらないで苦しんでゐるでは無いか、是は何といふ理屈だ。

然も見よ、懷手をして遊んでゐても地主とか、工場主とかいふものゝ腹は自然と肥えて來るのである。

然らば稼ぐよりも遊んでゐた方が樂でもあり、金持ちでもあると云ふことになる汗水流して働くのは馬鹿々々しいわけだ。

然しだ、茲に考へねばならぬのは、もしも職工や、小作農が金持の工場主や地主の眞似をして懷手をして遊んでゐたら、その翌日から鼻の下の建立に差し支えることになる。

汗は流しても、朝は早起きしても、少し位苦しくても、乃至は貧乏であつても、稼ぐに越したことはない、して見ると、稼ぐに追ひつく貧乏なしといふのは一面の眞理だ。

四　貧富の意味

閑話休題、貧とは無であり、少であることは以上說く所に依つて明白である、然も、少は無よりも多である、卽ち有である。

果して然らば貧とはこれ絕對的の意味ではなくて寧ろ相對的のものであると言ひ得られるでは無いか。

然し、一錢の金も無よりは富んでゐる。一枚の紙も一本の筆も、無に比較すれば尙且つ大である、多數である。

然しながら無に對しては大であり多數である所の一錢の金も一枚の紙も、更に十

錢の金、十枚の紙に對しては尙ほ少であると言はねばならぬ、然らば少必ずしも貧なりとは謂はれぬ。

さりながら十圓の金は少なる十錢よりも多數である、けれども百圓に對しては尙僅少である、その百圓も千圓に對しては尙すくなく、その千圓もまた一萬圓に比較しては且僅少である。

十圓より百圓より千圓より、尙且つ大なる一萬圓も、十萬圓に比べては尙ほ少である。

然らば卽ち大必ずしも富みたりと言ふことは出來ぬ、少必ずしも貧なりとも斷言は出來ない。

觀じ來れば、貧も富も比較的の言葉である、相對的のことである、絶對無限の價値ある目標ではない。

して見ると貧といひ富といふ、これに向つて適確な標準は樹てられない譯だ。

すでに適確な貧富の標準はないのだとすれば、貧しいものが不幸だと云ふ理屈もなく、金持ちが必ずしも幸福だといふことも當てはまらない、見方によつては貧乏人も幸福である、金持も不幸である。

要するに幸福も不幸も、自分の心に描く幻影に過ぎないのだ、貧とか富とかいふことは決して人間の幸福を左右するものではない。

神は元來人間に平等に幸福といふものを與へたのであるが、人間自身が貧富といふ現實的一時的の運命に眩惑して、人間本來の幸福そのものを味はふことが出來ないのみだ。

然らば卽ち人間本來の幸福とは何であるか、幸といひ不幸といひ、大分世間には感違ひをしてゐる者が多い。

以下項を改めて幸不幸に就いて說を立てやう。

然し、その前提として、人間は本來平等に神から幸福を與へられたのだと云ふ、

その平等の意味に就て少しく論じて見たい。

第四章　平等論

一　人間の本來

神は元來、平等に人間に幸福を與へたとは前節にも說いた、人間は本來平等である、幸も不幸もない、貧も富もない、貴も賤もない、一切無差別である、一切平等である、然らば平等とは何であるか。

見たところ、人間には幸不幸の差別がある、貧富の隔てがある、貴賤の上下がある、これが差別でなくて何であらう、平等とは受取れぬではないかと云ふものもあらう。

然り人間は本來平等である、それが何故見る目聞く耳に差別を生じたのであらうか。

仰いで天を見よ、蒼々として實に無邊無際である、又眞理の廣大なことを想像して見よ、天の無邊無際なるが如く、法界に圓滿普遍してその極を知らぬ、實に無始無終、不生、不滅、極めて圓明、極めて圓滿である『眞如一點の曇をうけて人間となる』と古聖は說いた、卽ち言ひかへて見れば眞理の人間と現はれたのを心と云ふのである。

けだし人間が此世に出來てから人間があるのではなく、まだ生れぬ先に人間といふ一つの意匠があつて然して後人間が出來たのである、出來べき理由があつて出來たのである。

此の觀念から斷定すると眞理は圓明圓滿なもの、心は眞理の人間と現じたもの、故に心は本來圓明圓滿なものであるとの三段論法が成立する、此の斷案に仍つて更に人間は本來平等であると云ふ斷案が下されるので有る。

卽ち心は人間である、心は圓滿平等である、故に人間は本來平等であるべき筈のものである。

圓滿なるが故に公明無私であらねばならぬ、圓滿なるが故に公明正大であらねばならぬ、公平無私、公明正大なるものは善である、幸福である、惡をゆるさず、不幸を與へず、暗からず明である、角立たず圓滿である。

平等なるべき人間に幸不幸、善不善、貧富貴賤の差別はあるべき筈はないのだが何故に人間の世界には此の理想と相反して貧富があり、幸不幸の別を生ずるのであらうか、以下、項を改めて詳細に說かう。

二　差別の世相

前にも述べたが、人間の心は眞理そのものである、眞理は元來圓滿無私なるべきものだが、その人間の心に現するとき、既に一つの汚點を受けてゐる、汚點とは何であるか、釋迦はこれを名づけて無始の黑闇と言つた、基督敎には說いてアダムイ

ヴがエデンの園に於ける智恵の實を食つたことで有ると云ふ。

然り、無始の黑闇である、生じ智恵をつけられたことである、平たく言へば『我』である、自我である、むしろ我慢である。

此の我と云ふものが赤兒が小兒となる頃には餘程成長してゐる、そこで見るものの聞くものゝ上に種々の思ひを起す、是を倶生の惑、亦は思惑といふ、思惑がいよいよ成長すると是非善惡の具を起して、これは善いとか是は惡いとか斷定をばじめる つまり、アダムイヴが、はじめは裸體でゐても少しく恥かしいとは思はなかつたが智恵の實を食つてから、神の前に裸體で出ることを恥づるやうに感じたのと同じ理屈だ。

此の思惑と見惑とはあらゆる人間にある、必ずしもアダムイヴの遺傳ばかりだとは言はれぬが、然し此の二つの惑があるために爭ひが生じる、嫉妬が出る、偏執になる、自負となり貪慾となり、恨み、疑ふ心が生ずるのだ。

是れ何故であるか、初生の時に帶來一星の我慢が次第に成長したが爲である、故思へば思惑となり、見れば見惑を生じ、知れば卽ち知障を生ずる、我見であるが故に自己を主とするが故に、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄の五道に轉々する、これが人間である。

つら〳〵人間の心を見るに、その性質が人々個々に異なる所以は、必ず由つて來る所がある。先天の約束や、父母の遺傳によつて母の胎内にある時から既に〳〵差別があるのである。

又此世に生れてからは風土や、教育や、周圍の境遇やの相違からその性質も種々別々に別れて來る、貧富の別が生じ、貴賤の差があり、賢愚の相違が出來る、卽ち億萬の性質をもつた億萬の人が出來、億萬の境遇を有する億萬の人が生じたのである。

差別は斯くの如き原因に依つて生じた、一因十果を生じ十因百果を生じ、百は千

に及び千は萬に及んで今日の有樣となつたのである。

此の差別を有する人間が生住異滅の間に爲すこと故、社會の出來ごとも習慣も種々無量になる。

然し此の種々無量の現象も萬果を打つて千因となし、百果を收めて十因に歸し、十を集めて一とすればやがて一順して初生の汚點、卽ち我慢、我執、我見に歸することが出來るといつても差支はない。

三　人間の鬪爭

斯の如く觀じ來れば人間界の大波瀾を通じて、一の道理の存することが分る、此の道理を名づけて因果の理といふ、果して然らば人間界は因果によつて作られたと言つてもよい。

我慢である、たゞそれ我見である、それが此の世の中を支配してゐるが故に爭ひはたえないのである。

碩儒ダーウキンをして世は優勝劣敗である、優勝劣敗は社會の眞理なりと言はしめたのである。

此の冷かなる聲、これかへつて獅子吼である、巖頭にうそぶく獰獅の聲である、天地もために震ひ動いたのである。

釋迦が天上天下唯我獨尊と言つたのと同じ聲である、基督が我は神の子なり人の子の救のために來れりと叫んだのと同じ聲である。

彼ダーヴキンは實に偉大なる眞理の發見者である、誰か然らずといふものが有るであらうか。

だが然し仔細に觀ずるときは優勝劣敗は道理にして不道理である、然して又不道理にして道理である。

何故に道理であるか。眞理の一部分を持つてゐるからである。何故に不道理であ

るか。眞理の一部分を缺いてゐるからである。

前にも述べた通り、優勝劣敗の相はもと我慢から生じたのである、唯一の我慢が因果の道理に依つて千狀萬態の差別の相を現じて優勝劣敗となつたので有る、故に根元の我慢さへ破れば俄然として差別も破れて、法界圓滿の姿となり、神通無碍の自由を得るのである。眞實現前して本來の眞理に歸するのである。

唯それ我慢である、故に差別を生じたのである、貧といひ富といふ、貴となり賤に終る、たゞ此の我慢の發育の如何に依るのではあるまいか。

釋迦孔子はこの優勝劣敗を名付けて生住異滅といふた、言葉は異なつても其意味の同じなることは、尙ほ進化と云ふことゝ無常と云ふ事と同一なるが如きものである。

實に世は無常轉變の相である、優勝劣敗の姿である、然しその優勝劣敗の相であるにも拘はらず人間の心に、本來の圓滿圓明の考へが電光の如く閃き、火花の如く感じられるのは何故であるか。

鳥の死なんとするや鳴く聲よし、人の將に死なんとするや言ふことよし、惡人にも情があるのはこの事である、實に人は冥々の中に人間本來の面目を感じるものである。

人には善惡兩性を備へてゐると云ふのは此の事である、此に於てか人間は平等ではないかとの考を起すのである。

然して斯やうな考へを起した人々は又種々なる意見を起した、社會平權論がそれである、天賦人權論となり、財産共同說ともなるのである、然し是等の說の生ずるのは社會進化の一段である。

四　我慢　我執

社會主義にしろ、男女同權說にしろ、何れもみな此の人間の平等を根本として立

てられた説である。

げに是等の説は高尚である、然して是等の説の生ずるのは眞理にむかつて進むべき段階である。

然して又、是等の説の發見者はあながち即時これを實行しやうとしたのではないけれども、然しその説の信者はそれを單的に實行しやうとする、此處に於て虛無黨が出來、社會黨が出來たのである。

斯くの如きは決して喜ぶ可き傾向ではない、天下大亂の基である、是等の差別と平等とは等しくこれ惡差別である、共にこれ惡平等である、二つながら排斥せねばならぬ。

何故に優勝劣敗は惡差別であるか、何故に社會主義、虛無黨の如きは惡平等であるか、何故ならば彼等は平等を離れて差別を説き、差別を離れて平等を説くからである。

卽ち一は平等が眞理であると説き、他は差別が眞理であると説くからである、優勝劣敗の差別は世相の一面であるがその全面ではない、社會主義の平等も世相の一面ではあるがその全部ではない。

世相はもと〳〵人間の我がこしらへたものであるから、我が破れゝば世相も破れる。

世相は優勝劣敗であるから優勝劣敗も破れる、然して人間本來の平等に歸するのである。

進化論者は優勝劣敗を以て社會の眞理だと説いた。我慢と自負とを常とする人間は、凡夫相當此の説に共鳴して、强者は弱者を制し、富者は貧人を侮り、智者は愚人を欺き、上下交利を爭つて、父子兄弟相爭ひ、民臣朋友相戰ひ一切の人間が修羅道に墮落するに至る、天下かくて亂れるのである。

差別が天下を亂すものであるごとく、惡しき意味の平等も亦天下を亂す、何故な

らば惡平等を以て惡差別を破らうとするからである。

人間界の差別は幾百世紀の間に於て一因萬果の理に依つて生じたもの故、因緣の消滅せざる間は差別も又消滅しないのである、差別の依つて來つた我慢を捨てねば平等には歸せぬ。である。

我慢を以て他の我慢を破らうとするのは恰かも火を以て火を救はふとするやうなものである。

唯に救ふことが出來ぬのみならず孟子の所謂水の益々深きが如く、火の益々熱きが如くに至る、これ要するに差別と平等とを別々に考へるからである。

思ふに差別、卽ち人々個々の心の相違や、社會百般の出來ごとや、習慣や、秩序やは幾億萬年のうちに生じたもので有るから、みだりに我執我見を捨て破ることは出來ぬ。強いてこれを捨てゝ平等を說く結果、父子兄弟君民長幼智愚一切の人間が自己の言ひ分を主張し、自己の權利を主張し、より惡き差別が生ずるのである。

差別を捨てやうとして却つて差別ができるのである、極端なる惡平等の結果は人類の將來を危ふするものである。

惡差別と平等の弊害は如上說く所の如くである、然して其の弊たるや、原因する所は人間の我執である、我慢である。

夫婦喧嘩は是より起り、兄弟爭ひも是から起る、親子の間もこの爲めに喧嘩となる、政黨もこのために政爭をする、國家もこのために戰爭をする、男女の權に差別のあるのも此の故である。

故に、人間本來の平等に歸るにはまづ此の我慢を破らねばならぬ、我執を打ち棄てねばならぬ、我慢我執を載せて流轉する因果の車を破らねばならぬ、破ると云ふのは外形的物質的に對する謂ではない、內面的精神的である、卽ち外界に對しては平等に卽し、差別することを言ふのである、豈他あらんや。

五　平等に歸れ

人間から我慢我執をとれば、心は卽ち前に述べたところの眞如に歸するのである眞如一點の曇をうけたのが人間の心であるから、その曇たる我慢を破れば元の眞如に歸する筈である。

基督敎の譬で言つて見てもアダムイヴがエデンの花園で智惠の實を食したが故に我慢我執が生じたのであるから、智惠の實を食はふとしたその心を取り除けば、卽ち神の心と同一に歸する筈である。

我慢を破つた心は圓明である、圓滿である、首尾もなく、終始もなく、無窮無極不生不滅である、是れが眞の平等である。

差別に住せず平等に住せず、平等に卽して差別、差別に卽して平等、是が卽ち眞の平等なのである。

差別は尙鏡花水月の如きものである、因緣がくれば花現はれ、因緣が去れば花は消える、水中の月もまた然りである、差別尙又然りである。

然しながら人間本來の平等は圓滿無邊、去りもせず來りもせず、無去來である、これ眞理の眞面目である。

天上天下唯我獨尊と言ふた釋迦、われは神の子也汝等われを信ぜずと言つたキリスト、天德を我に生ずと言つた孔子、いかに偉大ではないか、不用意に聞けば大我慢であり大我見である。

然しながら文字の葛藤に囚はれず直ちにこの三偉人の心の奧底を衝けば、眞に法界圓滿である。

維摩經に菩薩は一切の衆生を愛する事、猶父母赤子を愛するが如しとある、菩薩とは佛である。

聖書は神はその獨子基督をして十字架につけてまでも一切萬民を救はふとする程

に愛し玉へりとある。

佛教の衆生濟度と、基督教の愛とは差別はない、佛教がよい、いや基督教が眞理だと言ふのは我慢である、これでは宗教を信じても、まだその神秘に到達せぬものだ。

教典の言葉に着せず、言葉の糸をたぐつて教主の心田に打入らなければならぬ、眞實の心を以て眞實に研究せねば駄目である。

釋迦の說く所も基督の說く所も本來差別がある譯はない、差別があるのはたゞその言葉の綾の相違のみであつて、その言葉の綾が末世に至つて弊を生じ、差別となり、貧富となり、貴賤となり、然して戰爭となり喧嘩となつたのである、たゞそれ我慢が原因である。

故に我見我慢を破れば本來の平等に歸する、佛の慈悲、キリストの愛である、我執我慢を破つて、人間本來の面目たる平等に歸れば、そこに慈悲があり愛があり、然して期せずして幸福が生ずるのである。

六　地上の天國

然らば如何にして我慢を破るべきかと言ふことが問題である、我執我慢を破れば人間本來の平等に歸し、幸福は希はずして其身に至るものとすれば、人間は誰でも此の我執と我慢を去る可きことに力を盡さねばならない。

佛の慈悲、神の愛を體現し、平等を得るには下に對しては（本來上下はないのだが）人間は本來平等と思ふて同等に交際することは必要である、又上に對しては人間は我慢のある者故差別は世の實相だと思ふて尊敬を盡すのである、一人我慢を破つて此の理に通じそれが十人を化し、十より百に、百より千に及ぼし、億萬年の內にその數を次第々々に加へ行くことが出來れば此の世は佛の所謂安樂淨土となり、神の言ふ所の地上の天國となるのである。

尙ほ此の我慢を破るべく如何に觀念工夫したらよいかと言へば、佛敎、基督敎等の敎理について修養するは勿論、洋の東西、時の古今を問はず、あらゆる哲學、あらゆる文學、あらゆる物象に就て研究するもよいが宗敎の信仰を以て心を一にすることは何よりも必要である。

或はまた、自分の職業に勤むるのである、然して慾界を離れる工夫も肝要であらう。

自分を主とせず、事業そのものを主として勵むのである、高尙な娛樂趣味に心を傾けるのもよい、自分と云ふものを主として考へなければ我慢はなくなるものである。

我慢さへなければ、目に一丁字なき無學者も、一錢の貯蓄なき貧人も、神の愛・佛の慈悲を體得して、自から幸福なる生涯に入ることが出來るのである、我慢のある人は如何に財產があつても、如何に智惠があつても、いかに權力があつても、決して幸福とは言はれないのである、大厦高樓に美衣美食しても、陋巷に粗衣粗食する貧しき者よりも不幸なのである。

小我慢の人は、往々にして余は我慢はないと云ふ、それが卽ち我慢であることを知らないのである。

又、ナポレオンの如き大我慢の人がこれを棄てれば、ワシントンの如き圓滿の人となり得られるのである。人間相互ひに我慢を破つて共同一致、眞情を以て各その業を勵み、趣味娛樂を高尙優美にして、相愛し相助け合つて行けば、人々は期せずして幸福を體得し、社會は物質的差別より、精神的平等に近づき眞理に向つて一歩々々進化して行くのである。

斯くてそこに佛敎の淨土が來り、基督敎の天國が、此の地上に建設せられる結論にも到達するのである。

第五章　幸福論

一　富と權力

前章來、人間は我慢といふ毒虫を捨て去つて、本來の面目たる善に歸れば、貧富の差別もなく自他平等、幸福を享受することが出來ると說いた。

然らば卽ち幸福とは何であらうかに就て一言を費やすのも、强ち無用の事では有るまい。

幸福とは何であるか。

富める者幸福か、權力ある者幸福か、貧きもの幸福か、否、貧富貴賤と云ふやうな階級的差別的の境遇が決して幸不幸の運命を區別すべきものでないことは、前章來屢々說いた所であるから、富み、然して權力ある者が幸福だと云ふことは斷言し

得られない、だが然しながら既に人間は本來平等であるべきもので有るには相違ないが、貧富貴賤の差別が、此の世の實相であるとすれば、しばらく此の差別を基準として幸不幸を論じて見たい。

富める者は、一目いかにも幸福らしく見える、欲するものとして得られざるはなく、好む者として手に入らぬはない、大層高樓に美衣美食し、奴婢に侍づかれ、出入自動車あり馬車ありと云ふ生活は、いかにも幸福らしく考へられる、然し彼等は果して幸福であらうか。

金持と灰吹きはたまる程きたなくなると云ふ東洋の諺は、富をある程度まで得た者がより以上に獲得なんとするためには、法律に觸れざる以上は、あらゆる非義非道、あらゆる不倫不德、あらゆる醜行を敢てする心の汚なさを言ふたのである、それ程にまでしても金が欲しいと云ふのは、彼等が現在の程度の富に幸福を感じ得ないで、尙より多くを得たならば幸福であらうかの考へがあるからでは有るまいか

して見ると富と云ふことは絶對的の幸福では無いと言はれる。

百萬圓の富を得れば、少くとも十萬圓の財産家よりは幸福であるに違ひないのである。

然しながら百萬長者も千萬圓の財産家に比べてはその財産の評價が少ないだけにそれだけ不幸であるとも言はれる。

然しその千萬圓の資産家でも一億の金を有する者に比べては十分の一の幸福しか味はひ得られぬことになるのであるから、是等の事實から考へて見ても富と云ふものが、それほど人間に幸福を與へるものではないと言ふことが分るのである。

或は又、それが權力の方面から考へて見ると、郡長は一郡を支配するものであるから如何にも幸福らしく見える。

然し乍ら知事の支配を受け、その知事よりも權力が薄いと云ふことになれば、郡長よりは知事の方が幸福である。

けれども然しその知事も大臣といふものの支配を受けねばならず、その大臣でも英國の如き君主國ではともあれ、米佛のやうな共和國には大統領と云ふ君主國の皇帝のやうなものもあるから、その方が幸福であると云ふ結論にもなる、だがその君主なり大統領なりが幸福かと言へば決してさうでは無い、君主には君主の體面と威容を保たねばならず、氣儘自由に外出もできず勝手に旅行も出來ず、いろ〳〵不自由な點もあつて、却つて農民や勞働者の自由な生活を羨やましく思ふやうな場合がないでもない。

二　皇帝と貧乏學者

昔、ギリシヤにダイオヂニースと云ふ哲學者があつた、彼は學者であつたが、ちと變り者で桶の中で生活してゐた。

即ち大きな桶の中に入つて寐たり起きたり、その桶をころがして自分のすきな所

へ行つてはくらしてゐた。

ダイオヂニースの名前がアレキサンドル大王の聞く所となつた、これは例の有名なアレキサンドル大王で、當時武勇の名が世界に高かつたと共に世界統治の大望を抱いてゐたほどの英傑で、戰ふところ勝たざるなく、思ふところ成らざるなく、世の中の人からは此の位幸福なことはなからうと思はれてゐた人であつた、此のアレキサンドル大王がある日ダイオヂニースの名前をきいて訪ねて來た。

然し、ダイオヂニースは平氣で本を讀んでゐた、大王が來たからと言ふて何をするでもない、出迎へをするではない、勿論着かへる着物もない、桶の中で本を讀んでゐるのである。

威勢世に時めく大王、全世界統治の野心ある大英雄も此の一哲學者に對しては、蟲が飛んで來たほどにも歡迎せられなかつた。そこで大王は

『余はアレキサンダーである、御身の高名を聞いて、御話したくて訪ねて來た」

と言つた。

大王はその時、てつきり此の男は自分を知らないのであらう、泣く子もだまるアレキサンダーであると云ふことを知らないのであらうと思つた、それ故に自分から名乘つてきかせたのである、然しダイオヂニースは平氣である。

『あゝ、左樣で御座るか、それはよく御出でなさつた」

と言つた儘相變らず本を讀んでゐる。

大王はこいつ變な男だ位に思つたが、家來のものは怒つてしまつた、こいつ大王樣が、ぢき〳〵御言葉をかけるにも拘はらず、有り難いと思はず、小うるさいと言つた風な顏をしてゐるのは不埒千萬だとイキリ立つた、虎の威を籍る狐である、いつの世、何所の國へ行つても斯ういふ者がある、主人は何とも思つてゐないのに家來が騷ぎを大きくして終ふ。

そこでイキリ立つてダイオヂニースを引き立てゝ打ちのめそう位の考へだつたの

を、アレキサンドルは留めた、そして靜かに

『ダイオヂニース君　余は國王である、何でも出來ないことはない、君の幸福を得るために何が希望があつたら叶へてやらう』

と言つた。するとダイオヂニースは本をそこに置いて

『さうか、そりや有り難う』

と言つた、大王の家來たちは、さては此の老人慾が深い、さつきから平氣でゐたが何でも叶へてやると言つたものだから本を下へおいたぞ、何を言ふだらうと思つてゐると、ダイオヂニースは重ねて、

『ぢや濟まないが、そこを退いて呉れないか、日かげになつて本が見えないし、第一寒くつて仕方がない』

と言つた、これには流石の家來どももも顔を見合せて驚いた、アレキサンドル大王はさも〳〵感心したやうに、

『我友よ、君は幸福である、余は御身が羨ましい、余はせめて一時間でもいゝから君のやうな幸福な身分になつて見たいが……』

と、言つて、儘ならぬ浮世をかこちながらダイオヂニースの望み通り、そこを退いて立ち去つた。

三　病氣と死

此の話には如何なる意味が含有されてゐるか、榮耀榮華に飽き、權威武力は世界を統一せんとしてゐる程のアレキサンドル大王である、いかにも幸福の絶頂に達してゐるかに考へられる人である。

此の大王がダイオヂニースのやうな貧乏學者、しかも住むに家なく着るに衣なき乞食哲學者の生活を、お前は幸福である、おれも一日お前のやうな幸福な身分になつて見たいと云ふのである。

王侯の生活必ずしも幸福でなく、貧乏人の生活が必ずしも不幸でないことは是に依つて見ても明白である。

して見ると、幸福と云ふものゝ標準を財産の有無、地位の貴賤に求めることは不可能でもあり、又當を得ないことでもある、然らば幸福を我々は何處に求めたらばいゝのであらうか。

人間の不幸の最なるものは、何といつても死じあるかに考へられてゐる、是に次いでは病である。

なる程地位の賤しいと、貧乏人であること、此の二つが必ずしも不幸であると言はれぬものとすれば、不幸とは一般世間的には死であり病であるらしく考へられるのだ。

實際死ぬる程不幸なことはない、若くして死ぬ者は親兄弟に別れ、年老いて死ぬ者は妻子に別れる、世の中に是れ程不幸なことはないやうに考へられる、英國のある女王は死ぬ間際にその家臣にむかつて、

『もし今しばらく我が命を延ばしてくれる者があるならば褒美は願ひの儘に取らするであらう』

と言つたが、然し誰もその望みを叶へることの出來る者はなかつた、迫れる死期は人力をもて如何とすることは出來なかつた、それほどに死は不幸なものである、ソロモンの如き賢人でさへもわが子の死をなげいて眼を泣きつぶす程に悲しんだ、ある富豪は病氣で

『おれは死にたくない、もつと長生したい、誰かおれの命をとりとめたら十萬圓やらう』

と、博士や學士の肩書ある醫者に言つたが、さてその十萬圓の欲しい人でも、死ぬと云ふその病氣をなほすことは出來なかつた、それ程に死ぬことは不幸なのである。

然して王侯の貴きも、勞働者も等しくこの死から免かれることは出來ない、然らば死は人生の最大不幸であると言はねばならぬ。

死に次いでは病氣である、病氣となつて自由に外出も出來ぬ、食べたいものも食べられぬ、本をさへも時には讀ませられぬことがある。人と話をすることも思ふに任せぬ、死は一時的であるが、病氣は永久性を帶びてるだけに、ある意味に於てはより不幸であるとも言はれるのである。

死は果して人生の最大不幸でるらうか、病氣は是に次ぐところの不幸と言はれるであらうか、項を改めて論ずる。

四　幸福を何所に

死が果して不幸であるか、病氣がこれに次ぐ不幸であらうか、死に面して少しも不幸だと思はないものがあるのは何故であらう。喜んで死ぬ者もある、從容として感謝しながら死ぬ者がある。

ジャンダルクは佛蘭西のために火刑に處せられて却つて喜んで死んで行つた、博士パッカスはもう死ぬのに三十分間位しかあるまいと醫者から宣告されて、

『爲す可きことを爲しつくして死ぬる自分は幸福である、然し此の死をより幸福ならしめるために、最後まで神に祈らう』

と言つた、そして感謝の祈禱を捧げながら死んだ。

またニューマン大僧正は大熱に煩ひ、醫者にも匙を投げられたが少しも泣き悲しみはしなかつた。

『信仰の善き戰を續けて今日死ぬるは幸福である、さり乍らまた自分はあすべき事業があるから、それを成就してからでなければ死なれぬ』

と言つたが、とう〳〵その病氣がなほつた。病氣中も少しも不幸だなどゝは考へず、これ神が自分を試みるのであると言つて却つて感謝してゐた位である。

斯ういふ人々に取つては死ぬと云ふことも、病氣と云ふことも、少しも不幸ではないのである。

死はむしろ天國へ行くべき途であり、病氣や困難辛苦は、その人間として品性を完成すべき修養の一助として、むしろ幸福を以て迎へらるべきものである。

王侯の權力も、百萬千萬の富貴も、決して幸福を求むるので絶對的方法ではない死も病氣も、必ずしも絶對的不幸であるとは言はれないことは前述の如しである、果して然らばわれ〳〵幸福を何に求めたらばよいのであらうか。

五　運命と幸福

幸福とは絶對的に求めらる可きものではない、案外貧乏な境遇にあると思はれてる人が幸福で始終平安に生活してゐたり、金持の家庭が意外に不幸なことの多いのに見ても、幸福が絶對的のものでないことが分る。

既に絶對的でないとすれば求めずして得られる運命のやうなものであらうか。

獨逸のモルトケ將軍は近世の名將である、獨逸帝國の勃興は實にビスマークとモルトケの力であると言はれてゐる。

そのモルトケ將軍が戰勝には四つの要素が必要であると言つてゐる、その一つとして運命を數へてゐる。

戰勝と云ふことは、軍人にとつては幸福なる結果である、幸福の要素の一つとして運命が數へられると言つてもよいと思ふ、佛國のヴイクトルユーゴーは

「一千八百十五年六月十七日の夜に雨が降らなかつたならば歐洲の未來は全然一變したであらう、雨滴はナポレオンを打ち倒した、空を掩ふ時ならぬ雲は世界を轉覆するに十分であつた、ウオトルローをしてナポレオンの運命を定めしむるために攝理は單に雨を要せしのみだ」

と言つてゐる。

砲兵を集中して敵の堅を碎くのがナポレオン得意の軍畧であつた、若しナポレオンが豫定の作戰計劃の如くに十八日の午前三時に戰爭が始まつたならば、午後三時には英軍を擊破することが出來て、プロシヤのブロッヘルが來てウエリントンを援けない以前に早や戰爭は片付いてしまつた筈である、所が前夜雨が降つたので道路は泥濘を極めて砲兵の運動が自由ならぬところから、開戰が遲れて漸やく午前十一時になつた。

それでも佛軍の攻擊は非常に激烈だつたので、さしも物に動せぬ英軍のウエリントンも、朝のうちは彈丸雨飛の間に敵軍をにらんで石像の如く泰然としてゐたが、夕刻になつては時計を出したり入れたり、

『夜が來るかブロッヘルが來るか、それとも我軍が攻擊に堪えないで敗戰するか』

と言つた位である、氣の早い者は走つてブラッセルスに英軍の敗報を傳へた位であつた。

此所一息といふ所へブロッヘルが援軍に來て佛軍の側面をついたので、ナポレオンの慘敗となつたやうな譯である。

故にウオートルローの戰爭の勝敗を決し當時の歐洲の大勢を定めたものは六月十七日夜の雨であつて、雨は人力の如何ともなし難いところ、要するに運命である、運命はウエリントンを幸福に、ナポレオンを不幸に導びいたのだ。

米國の前々大統領ルーズベルト氏は以前ニューヨーク市の知事であつたが、その英才を忌まれて副大統領にまつり込まれた。

米國では大統領が在る限りは副大統領は閑散である、言はゞ敬して遠ざけられたので殆んど隱居役同然なのである。

然るに計らずも運命はルーズベルトに幸福を齎らした、それはルーズベルト自身も思ひもかけぬ事實であつた。

それは何であるかといふと、大統領マッケンレーが刺客のために暗殺されたので

ある。

改選の際はちがふが、米國では大統領死去の際は副大統領が大統領に昇任するのが法律である、そこでルーズベルト氏は大統領となつた。

所謂蛟龍雲雨を得て池中を出でたのである、若し初めから大統領候補を爭つて選擧に當つたならば或は當選覺束なかつたかも知れない。

然るに幸か不幸か、人々に嫌はれて隱居役にまつり込まれたのが結局運の拓ける基で、その手腕を發揮して大統領に再選までされた、こゝにも運命が人間に意外の幸福を與へた事實がある、マッキンレー氏の不幸は、ルーズベルト氏の幸福となつたのである。

人間の幸不幸が、その運命に依つて左右せられることの多いのは、モルトケ將軍の言葉をまたず、近き此のルーズベルトの例に見ても明白である。

六　富人と貧人と旅人

茲に幸福と不幸とに關する一場の寓話がある、或る片田舍に貧しき夫婦と、富める夫婦と二組の家庭があつた。

ある冬の夜のことであつた、一人の老ひさらぼひたる、然も見すぼらしい旅人がいかにも疲れたらしく此の富める者の家の戸を叩いた、もう仕事もをはり夕飯もすんで寢やうとする所を叩き起されて富める者は內心腹だゝしかつたが、起きぬわけにも行かないので戸をあけると件の老人である。

『何か用かね』

と、言葉荒々しく訊いた、旅の老人は丁寧に禮をして、

『いや折角御休みのところを甚だ失禮ではありますが、旅の者でありまして、疲れてもうちつとも歩くことが出來ませんが一夜のお宿が願へれば結構です』

と言つた。

富める者夫婦は頭のてつぺんから足のつま先まで、その旅の老人を見上げたり見下したりしてゐたが、一晩宿をかしたところで、たつぷり御禮の貰へそうもない見すぼらしい旅人である、これはことわつた方がいゝと思つたか、

『いや家は宿屋ではないよ。もう二三十町もゆくと町があるから、其所へ行つてとまつたらいゝだらう』

と言つた、旅人は尙ほおしかへして、

『そんな事言はずに泊めて下さいよ、もう疲れきつて一足も歩くことは出來ないのですから』

と哀訴したが富める者は何うしても訊かなかつた、宿賃は拂ふからと言つて賴んだが、こんな汚ない風をしてゐる旅人が何を持つてゐるかと思ふのでとう〳〵泊めなかつたのみならず、戸の外へ突き出してしまつた。

これを先刻から見てゐたのは、向ひ隣りの貧人の夫婦であつた、いかにも疲れたらしい老ひたる旅人が、富める者の家に宿を借りやうと思つてことわられ、悄然として歩き出したのを見ると可哀想になつて

『もし〳〵貴方』

と呼びとめた、老いたる旅人は疲れた足を引きずつて歩き出したが、呼びとめられて振りかへり

『何か用ですか』

『外ではありません、見れば大分お疲れのやうでもあり、これから次の町まで行くとしても骨が折れます、何なら私どもへお泊りになつたらどうです』

と、言つた、渡りに舟と喜んだが旅人は一旦はことわつた。

『御親切は有り難う存じますが實は私はお金をたんと持つてゐません、折角お世話になつても御禮をすることも出來ませんのです、ですから左樣いつては失禮ですけ

れども、實は初めから貴方に御願ひしないでお金のあるお隣へ泊めて頂かうと思つたのです』

と、言つた、貧しいけれども親切な此方の夫婦は、

『何をおつしやるのです、私は何も御禮が欲しくて貴方を御泊めするのではありません、御年を召してらつしやる貴方がこれから夜道を一里も御歩きなさるのが御氣の毒ですから、汚ないところですが御宿をしやうと云ふのです、そのかはりほんの御宿だけで喰べるものと言つたう粟飯位ですから、それでよかつたう御泊りなさいまし』

と言つた、旅人は此の情ある言葉にどんなに喜んだか知れない。

『そんなに御親切に仰有つて下さるならば、それでは御厄介でもとめて頂きませうかな』

と言ふことになつて、旅人はやがて貧しい夫婦の家へ入つて、その疲れた足を休めることになつた。

七　貧苦より幸福へ

折角親切に言つて老年の旅人を泊めはしたものゝ、貧しい夫婦は本當に何も御馳走するやうなものはなかつたから、

『ほんとに何にもありませんが暖かいだけが御馳走です』

と言つて粟でこしらへたお粥の湯氣の立つてゐるのを旅人にすゝめた。

『冬は暖かいのが何よりです』

と、旅人は喜んでその心盡しの御馳走をたべた、そして名高い料理屋で山海の珍味を食べたよりも旨いと言つて褒めた、餘りほめられたので貧人夫婦は、

『御氣に召して結構です、ではもう一杯いかゝですか』

と言つたが、言つてしまつてからハッと思つた、もう一杯ほしいと言はれても實

はもうそれでお仕舞だつたのである、もう一杯ほしいと言はれたら如何しやうかと思つてゐたが幸ひに旅人は、

『いえもう十分頂戴いたしました』

と、辭退したので貧人夫婦はホッとしたやうに顔を見合せた、さてそれで夕飯は濟んだが心配になるのは夜の寐床であつた、何故かと言つて夫婦二人がきて寐る二枚の布團より外にはない。

『何うしやうかなあ、一組の夜具では仕方がないな』

と夫が言へば、妻は答へる。

『仕方がありませんから私達の夜具を御貸し申しませうよ、二人は若いのですから藁の上に寐てもよう御座いますからね、あの方はお老人ですもの、暖かにしてあげませうよ』

『俺も左樣思つたがお前がどういふかと思つたのでな』

と夫も喜んだ、そこで二人の寐床をそつくり其の儘老年の旅人にやつて寒くないやうに行火まで入れてやり、二人は藁をしいて寐た。

さて其の翌朝であつた、老人は相變らず暖い粟飯に舌鼓を打つて、貧人夫婦と話をしてゐたが、

『さて御二人さん、いろ〳〵御世話になりましたが是で御暇いたします、そこで此の御親切の恩がへしに、御禮がしたいと思ひますが、何か欲しいものはありませんか』

と言つたが二人は氣にもとめず、

『いや〳〵、私たちは別に欲しいものはありません、二人が仲よく、一生着る物と食ふ物に困らず安樂に暮してゆければ外に望みはありません』

と言つた、旅人はうなづいて、

『よろしい、それではお二人は仲よく、一生安樂に暮させてあげます、三つまでは

望みを叶へてあげてもいゝのです、これで二つですからもう一つ望みのものを御言ひなさい』

と言つたときには、その老人の姿は、急に神様でもあるかのやうに、神々しくなつた。

貧人夫婦はさては神様が斯うやつて國々を歩いて貧乏人に幸福を與へてくれるのだと、はじめて氣がついたが二人が仲よく一生安樂に暮してゆければその外には別段望みたないのだから、

『御親切に有り難う存じますがもう外には何も望みはありません』

と言つた。

神様の使のやうなこの旅人は夫婦の者の慾のないのに感心して、

『さうですか、然しもつと大きい立派な家に住みたくはありませんか』

ときいた、夫婦はしばらく考へてゐたが、

『さうですね、若し此の土地に此の儘ゐられるならば……』

と言つたかと思ふと、その旅人の姿は急に消えて自分たちはいつの間にか、御殿のやうな立派な家で立派な着物を着てゐるので、狐につまゝれたやうにきよろ〳〵四方を見まはしてゐた。

八　幸福の使

呆れてゐる内に旅人の姿は見えなくなつた、夢ではないかと頬べたをつねつて見たけれども痛いから夢でもないらしい。

さては二人の貧乏で直正なのを神様が可哀相に思つて斯うして下すつたのかと今更のやうに夫婦手を取り合つて喜んでゐた。

此方は向ふ隣りの富める者夫婦である、夜があけて朝、顔洗ひに出かけて外を見ると、こは如何に、目の前に立派な大きな家がある、今まであつた貧乏人の汚ない

家は何所へ行つたか分らない。

まさか一晩に風に吹き倒されたわけでもあるまいと思つて見てゐると、その大きな立派な家から貧乏人夫婦が昨日とは打て變つた立派な仕度をして、樂しさうに話をしながら出て來た。

おや〳〵をかしいなと思つたので外へ出て、

『若し〳〵一體これは如何したと云ふのですか、此の家はお前さんの家ですか』

ときいた、貧乏人夫婦は笑つて、

『左樣ですよ、實は昨夜神樣が私の家へお泊りになりましてね、私共の貧乏なのを氣の毒に思つて一晩にこんな立派な家をこしらへて呉れたのです』

と、根が正直なものだから隱さずに昨夜からのことを話をした、是をきいた金持夫婦は齒がみをして口惜しがつた。

『だから私が言はないこつちやない、あの旅人は貧乏さうに見えても懷具合はいゝのだから、御泊めなさいと言つたのに、お前がことわつたから、此樣ことになつたのだ』

と亭主がいへば妻君も負けてはゐない、

『いゝえ違ひますよ。私はとめなさいと言つたのに貴方がことはつたのですよ、何てえ間ぬけな亭主だらう』

とやり返して忽ち夫婦げんくわになつた、馬鹿だ、間抜けだとしばらく言ひ合つてゐたが、其の内に女房が氣がついて、

『お前さんと此所で喧嘩したつて仕方がない、どうせまだ遠くは行かないから後を追ひかけて引き戻して一晩とめてやらうぢやありませんか』

『ウン、それがいゝ〳〵』

『歩いて行つたのでは駄目だから馬にのつてらつしやいよ』

『ウンよし〳〵』

『もしお泊りにならないと言つたら、三つの御願ひだけでも叶へて貰つてゐらつしやいよ』

『ウンよし〳〵』

と、二つ返事で亭主は馬に鞍を置いて鞭を當てゝ飛び出したが、おひる頃になつて漸やく追ひついた。

『もし〳〵神様、昨夜は失禮いたしました、實は昨夜あれから家内とも相談いたしまして、あなたを御泊めしやうと思ひ外へ出たところ、もう御姿が見えませんでした、それで今朝おあとを追うて參りましたのですが、どうか今晩手前どもへお宿を願ひます、粟飯などはさしあげません、どつさり御馳走します』

と言つて頻りに賴んだが神様はとう〳〵訊かなかつた。

『馬鹿なことを言ふものではない、今更もとの道へ引きかへして如何するのだ』

『それでは誠に申かねますが三つの御願ひを叶へて下さいまし』

『うむ、叶へてはやらうが、然しお前のためにはならないぞ』

『爲にならなくつても願ひさへ叶へば結構です』

『よし〳〵、それでは家へ歸れ』

『きつとですね、神様』

と、念を押して金持は神様に別れた。

何の願ひさへ叶へば泊つて貰はなくもいゝ、さて何を御願ひしたものかな、ようく考へて御願ひしなくつちや成らないと思ひながら馬に乘つてもどつた。

九　運命の轉換

慾の深い金持はいろ〳〵に考へた、何を御願ひしやうかしら、隣の貧乏人のやうに大きな家を建てゝ貰はふかしら、それともお金をどつさり貰はふか、あれや是やと考へながら來ると、つい手綱の方が疎そかになるものだから馬も思ふやうには走

らない、のそ〳〵と牛のやうにのろくさ歩つてる、たまには道草なぞ食つて中々はか取らない。

『畜生、こんなのろくさい馬はありやしない、牛にも劣つてる、いつそのこと死んじまへ』

と、鞭でビシヤリと打つと、如何したものか馬はそこへころり倒れてしまつた。

おや〳〵是ぢや神様約束がちがひますと思つたが、死んじまへと御願ひしたやうなものだから仕方がない。

馬の死んだのは勿體ない、こいつを賣れば死んだからつて三十兩にはなるのだが持つて行く譯にも行かないから仕方がない、殘念だがまだあと二つ御願ひが殘つてるから埋め合せをすれば馬の一疋位惜しくはない、然しこの鞍だけは金が掛つてるのだから是だけは持つて行かうと、鞍をウンコラ〳〵擔いで歩き出した。

『はてな、まだ二つ殘つてるのだが今度は上手にいゝ物を御願ひしやう、何がいゝだらう、やつぱりお金かな』

と、思ひながら來たが、一里ばかりくると、かついで居る鞍が重くつて仕方がない。

『あゝ詰らない、俺は斯うやつてウンコラ〳〵鞍をかついで苦しみながら歩つてるのに女房の奴め、家で晝寐でもしてゐるだらう、思へば忌々しい、この鞍を彼女に背負してやりたいものだ』

と、何心なく言ふと不思議や鞍はひとりでに金持の背中を離れて何處かへ飛んで行つてしまつた。

やれ〳〵樂になつたぞと思ひながら何の氣なしに家へ歸つて來ると、女房は鞍を背負つて泣き叫んでゐる。

『何うした馬鹿、鞍などしよつて……』

と怒鳴りつけたが、女房はもう三つの願ひどころではない、先刻から鞍が背中に

張りついたやうで取れないので大騒ぎをやつてる。

『取つて下さいよ、苦しくて〳〵仕方がありませんから』

『よし來た』

と、取らうとすれば肉を千切れるやうに痛くて、取れるどころではない、益々身體へ粘りつくやうな始末である。

此所で始めて先刻何心なく此の鞍を女房にしよわしてやりたいと言つたことを思ひ出して、さてはあの爲めに早速神様が言ふことをきいて女房の背中へしよわせたのだと思つたが、茲が大事なところである、この鞍をとれば三つの願ひがみんな終えてしまふと思つたから、今までのことをすつかり女房に話して、

『少し我慢しろよ、今おれが神様にお願ひして隣に負けないやうな立派な家をつくつて貰ふから』

と言つたが、仔細が分ると女房はもう默つてはゐない。

『本當にお前さんは間抜けですね、どんなに大きな家になつたからつて、一生鞍などしよわせられて堪りますか、お前さんがお願ひしたのだから、もう一度御願ひしてこれを取り放して貰つて下さいよ』

『まて〳〵もう少しの我慢だ』

『いやですよ、我慢は出來ませんよ、早くとつて下さいよ、あゝ痛い〳〵』

と轉がり廻つて泣き叫ふので亭主も仕方がなく、神様に御願ひすると鞍はわけなく女房の背中から離れた。

結局馬を殺してしまつただけが此の金持の損であつたが、貧乏人は生涯幸福に暮したといふ。

これは一篇の寓話にすぎぬが、幸福と云ふものが求めて得られるものでなく、運命に左右されることが多いことが分る。

即ち貧乏人は別段旅人か神様と思つて泊めたわけでもなく、また幸福を求めやう

と思つて泊めたわけでもなかつたが、親切と同情とは計らざる幸福の種となつた、金持夫婦は幸福を求める心は切實であつたが、運わるく神樣をとり逃した爲めにわざ〳〵後を追ひかけて行つたが、得たところは決して幸福ではなかつた、自分の目の前に來た幸福の運命を、不親切と吝嗇とのため取りにがしたこの金持と、一旦金持の家へ入つた筈の幸福を親切と同情のために自分のものとした貧乏人との、この二つの話は幸福と云ふことに就て深い教訓を我々に與へてゐると思ふ、運命は茲に僅か一瞬の相違で幸福を貧人と富人とに轉換させたのである。

運命と云ふことは、人間の幸福を左右すべき大なる力である、然しその運命を自分に幸福であらせるには、決して運命そのものにのみ任せるわけには行かぬ、幸福なる運命を得べく平素日常の萬般の行爲に眞面目で親切であらねばならぬことが必要である。

一〇　幸福の意義

或る人が一代にして鉅萬の富を作つたところの所謂成功者に

『君はなか〳〵の成功だが、定めし君の計劃したことが着々其の圖に當つたのであらう』

と訊いた、すると其人は、

『いや〳〵左樣ではない、利は決して初めからさう大膽な計劃をしたのではない、私の計劃どほりだつたらば、私はこんなに成功はしてゐない、反つて私には案外のうまいことばかりが起つて、今日のやうな成功を見たのであると言つてよい』

と、答へたさうである。

眞に然りである、失敗も意外のことから起るが、成功もやはり意外のことから來る。

用意周到、是ならきつとやれると思つてゐても病氣になれば折角の事業も水泡に歸してしまふ、更に死は人の事業を中道にして廢絶させてしまふ、死生命あり、富貴天に在りである。

幸福と云ふことも卽ち死生の命あるが如く、富貴の天にあるが如きものである、これを得ると得ざるとは天の意を得たるもの、卽ち運命である。

人は失意のときには運命に思ひ及ぶのであるが得意のときには往々にして運命を忘れる。

卽ち不幸に際しては運命を思ふが幸福に處してこれを忘れる、得意のときにも失意の時にも運命は常に人間を支配してゐる、人間は誰でも到底運命に服從しなければならぬ。

失意の人が天命に順從して安んずるのが大切であるばかりでなく、得意の人も運命の意味を知つて之を樂しみ之に感謝するの必要がある。

貧賤に生れたのが運命であれば、富貴に生れたのも運命である、善き親を有ち善き妻善き子を持つたのも運命なれば、惡しき親を持ち惡しき妻惡しき子をもつのも運命である。

文明の自由國に生れたのも運命であれば野蠻未開の國に生れたのも運命である、幼にして父母を喪ひ或は妻子を失ふのも運命なれば一家ことごとく順境であるのも運命であると言つてよい。

天命に順從するのは聖人の敎である、然して宗敎の信仰歸趣も亦運命の眞意義を知つて是を樂しみこれに感謝する時に存するのである。運命の眞意義を知らぬものは要するに迷へる人である、醉生夢死の人である。

如上說く所に依つてみれば運命の眞意義を知つて、これを樂しみ、これを感謝する人には不平不滿がない。

失意も運命である、病氣も運命である、失敗も運命であると思へば不幸と云ふこ

とも考へられない譯である。

故に幸福の意義は運命を知つて、然して是を樂しむところにあると言つてよい、果して然うば運命とは如何なるものであるか。章を改めて說いて見たい。

第六章　運命論

一　自然と運命

滔々たる常人は運命の意義に就ては何の解釋も持たない、好運に逢ひ順境にあれば、唯うか〳〵と面白をかしく暮してゐるが、さて一朝不運に逢ひ逆境に陷れば忽ち嘆き哀しみ呟やき怨み、不平を抱いて或は失望落膽し或は自暴自棄する、斯の如き人々は遭ひ難き貴重なる人生を唯ゆめの如く過す者である、實に憫む可き人人である。

或はまた運命を以て無知無覺なる盲目的勢力の機械的活動の結果と見る者がある要するに唯物說を唱ふる學者の見解である、洪水が善人の田も惡人の田も一時に押し出すやうに、地震が義人の家も奸人の家も共に倒壞するやうに、運命とは自然の

ことで自然の眼には、正邪善惡の差別はないと言ふのである、非常なる勢を以て激動してゐる數百馬力の蒸汽機關に觸るれば義人の體も用捨なく彈ね飛ばされんければならぬ。

宇宙自然力の大機關は無始より無終に凄まじき勢を以て廻轉してゐる、人は時には之がために彈ね飛ばされるのである。

運命とは畢竟此の運動の廻り合せである、去れば哀しんでも悶えても詮がない、唯此の自然を出來るだけ支配し出來るだけ利用してゆくのが人間の伎倆である、その他には誰れをか怨まん、唯だ諦らめてゐるより外に、致し方はないと云ふのである。

然し自然は山岳を以て人間を閉ぢ込めても、科學はトンネルを開き汽車を通じて其の抑壓を受けない。

自然は海洋を以て人を鎖しても、科學は滊船を走らして却つて交通を容易ならしめる、科學の進歩は斯の如く自然を支配し自然を利用してゐるのである、然も人間は到底運命に制せられ之に服從せねばならぬと云ふ事實は依然として存してゐるのである。

然して此の運命なるものが、無知無覺なる盲目的勢力であるならば、自覺ある靈知ある人間が斯る者に制壓せらるゝのであるから、恰かも靈智ある人間が無智なる猛獸に蹂躙されるものに等しい。

若し斯やうな狀態であるならば、人間の運命は隨分と悲慘なものであるばかりでなく、生甲斐のなき、希望のなき生活であると言はねばならぬ、運命とは決して斯やうなものではない。

二　運命と因果應報

或は又、人間の運命は單に因果應報の然らしむる所だと解釋する者もある、卽ち

善因あれば善果あり、惡因あれば惡果あり、十因百果を生み、千因萬果を生むと云ふのである、それが卽ち人間の運命だと云ふ說も生ずるのである。

此の見解に依れば、人間が不幸薄命の境遇にあるのは、過去の惡因の致す所であつて、恰も囚人が獄中で苦役をしてゐるやうなものである。

否、それよりも惡い、囚人が監獄で服役するのは自分に犯せる罪惡と云ふ因の惡果であるが、此の因果應報說は時に或は自分の前世の罪業と云ふやうな、現在に何の關係もないことの爲めに苦しまねばならぬやうな事になるのであるから、甚だ以て人間の運命は辛いものであると言はねばならぬ。

或は又千變萬化の運命を差別の妄見であると思ふ者もある、風起つて波瀾湧き、風やんで唯一面靜平の水面のみであると云ふのである。

人間の運命は千差萬別であるが、深く入つて、その本體より見來れば平等一如である。

千變萬化の運命の如きは畢竟忽ち現はれて又乍ち消ゆる泡沫にしかない、是がために喜悲するのは愚痴であると言ふのである。

然し智は斯く說かれてもそれで滿足するかも知れぬが、情はなか〳〵理屈をもつて說くことは出來ない。

情は比較的卒直である、情をころして死灰の如くならしめるならばともかくも、決して理屈をもつて活ける情を滿足せしむることは出來ない、亦從つて意志を健全に活動せしむることは出來ない、ブルターク は

『寂滅を說いて死の恐怖を除かんとしてもそれが果して何の効があるか、これは恰かも怒濤狂瀾を恐るゝ船客にむかつてお前達靜かにしろ、此の船は程なく海底へ沈むぞと言ひきかせると同じである』

と言つた。

千差萬別の運命の必ずしも人世の實相でないことは言ふまでもない、然し智と理

のみでなく、情と意と働く人間にむかつて此の運命の假相なることを說くのは、又難破船の客にむかつて滅亡の時の近きことを說いて、死んでゆく者を欺かすやうなものであらねばならぬ。

三　運命觀五則

此所に一人の父があるとする、更にある時に嫣然たる温顏を以て子に菓子を與へある時はまた嚴乎たる色を作して鞭うつことがあると假定する、その子の父に對して如何なる感を抱くかは、直ちに以て、人間の運命に對する譬諭となすことが出來る。

父の心は、子供の解釋一つである、從つて思ひ〳〵である、甲子は菓子を與へられたときには慈父の如く喜び、鞭うたれたる時は不慈の父として怨む、これは普通一般の人が運命に對する態度と見てよろしい。

又乙子は、温顏となり菓子となり、或は又厲色となり鞭打となるも是れ父の心であつて如何とも仕方がないの法則に依りて定まりたる運命

然もその温顏も厲色も一定の法則のあるもので、子の如何ともすることの能はぬものであるとなすので、是は運命に對する唯物論者の立場である。

又丙兒は、父の温顏となり菓子を自分に與ふるのは、自分に善行と云ふ因があつたからで、厲力となり鞭打となつたのは惡行のためである、因果の理法の然らしむるところであるから、成るべく善行に努めねばならぬと思ふ、これは運命を因果應報の關係から生ずると觀測するものである。

丁兒は又温顏喜ぶに足らず菓子必ずしも喜ぶに足らない、厲色必ずしも憂ふるに足らぬ、これは一時の假相である。

父その人の本心は恒久不變であると思ふので、これは平等論者の觀測と見てもよろしい。

又戊兒は温顔厲色共に感謝すべき父の慈悲心であると思ふのである。

以上五人の子の内誰がよく父の心を解してゐると言ひ得やうか、それは順次項を改めて説くことにするが、人間の運命に對する見解も亦略ぼ此の五則の外は出でまいと思ふ。

四　天地の德

不幸も幸福も是れ人間の人格を完成すべき試練であるとなして、不幸にも悲觀せず幸福にも樂觀せず、天命を樂しむものはもつともよく運命を解してゐるものであると思ふ。

孝順の子の心は卽ちこれである、唯物論ではない、因果論でもない、平等論でもない、孝順の心を以て運命を解釋するのでなければならぬと思ふ。

親に仕ふるの一事ばかりが孝ではない、東洋の一學者は斯う言つた。

元來孝は太虛を以て全體となし萬劫を經ても終りなく始めなし、孝の無き時なく孝の無きものなし、全孝闘には太虛を孝の體段となして天地萬物を其中の萠芽となせり、斯くの如く廣大無邊なる至德なれば萬事萬物の中に孝の道理備はらざるはなし、就中人は天地の德、萬物の靈なる故に、人の心と身に孝の實體みな備はりたるに依り身を立て道を行ふを以て工夫の要領とす、身を離れて孝なく孝を離れて身なき故に、身を立て道を行ふが孝の總領なり、元來をよく推し究めて見れば我身は父母に受け父母の身は天地に受け、天地は太虛に受けたるものなれば本來我身は太虛神明の分身變化なる故に、太虛神明の本體を明らかにして失はざるを身を立つると云ふなり、太虛神明の本體を明らめ立てたる身を以て人倫に交り萬事に應ずるを道を行ふと云ふ、斯くの如く身を立て道を行ふを孝行の總領とす。

以上の如く、孝を以て人間の全德を掩ふものとしてゐる、又宋の張横渠はその一

代の名文『西銘』に於て、

乾をば父と稱し、坤をば母と稱す、民は我が同胞。凡そ天下の疲癃殘疾煢獨鰥寡は皆わが兄弟にして無辜なるものなり。

と言ひ、又

富貴福澤は將にわが生を厚ふせんとして貧賤憂戚は以て汝を玉成す

と言つて、富貴福澤は吾が生を厚ふして我をして善をなすの餘裕を與へ、貧賤憂戚は我を拂亂してその品性を鍛練せしむるのだから周公の富を以ても驕らず顏子の貧にゐても其樂を改めざる可しと爲し、

樂しんで憂えざるは孝に純なる者也、その親に仕ふるや之を愛するときは喜んで忘れず之を惡むときは懼れて怨むなかれ、此の孝子の心を以て其の順逆の運命に對し天を樂しみ命を知つて憂へざるはこれ純孝也。

と言つてゐる、誠に孝順の心を以て運命に對するのが道を樂しむ君子の心であつて、人生觀の上乘なるもので、此の心ある人は幸福の生涯を享受し得られるのである。

五　運命の祕奥

然しながら太虛と言ひ、乾坤(天地)と言ひ、東洋の思想は何れも茫漠としてゐて人間孝順の心を喚起する力の尠少なのは甚だ遺憾である。

然るに、神の充ち足れる德は悉く形をなして基督にありと言はれる。

基督は、神を代表して此の世に顯現し、神は天父にして仁愛と正義とを其性とすることに依つて具體的に顯彰し、畢竟菓子と鞭とが等しく慈父の愛より溢れ出づる甘露なる如く、人間順逆の運命も亦等しく慈愛の天父の聖旨より出づる無限の恩寵なることを明らかにしたのである。

人間は如何に剛情なる人でも到底運命に抗することは出來ぬ、必ず運命に服從し

なければならぬ。

併し苟くも靈智ある人間が無知無覺なる運命に全く無意義に屈從することは堪え難い惨事であるが、愛に服從し正義に服從するのは反つて喜ばしいことである、信仰の目を以て、運命の妙えなる秘奥を看得し、その恩寵を味はひ得る者は、樂しんで運命に順從することが出來る。

運命に順從するとは、卽ち神の正義と仁愛とに順從するのである、何某と云ふ男はもと惡い商賣をして金を儲け財産をつくつたが、ある時教會に基督敎の說敎をきいて痛く感心した。

『同一の人間でありながら斯くも差異があるのであらうか、此の說敎者は青年を愛し婦女を愛し、これを敎育するために心を盡し身を努めてゐるのに自分は青年を墮落に導き、婦女を喰ひ物にしてゐるのである』

と悄然として家に歸つたが、それ以來良心を攻められ、非常な煩悶の末に斷然惡商賣を廢業して基督敎の信者になるの決心を起したが、その妻はこれに反對した、そこで此の男は、より大なる決心を以て、妻に別れて獨身となつてまで洗禮を受けた。

そして信仰生活をしてゐるときにある晩、祈禱會に出席して夜中に歸宅すると、戸はあけつぱなしで品物や金も大分紛失してゐる、遠くは行くまいとその泥棒のあとを追ひかけて行くと、急いだのと道が惡かつたのとで堀の中へ落ちて氣絕した、しばらく經つて氣が付くと額に血が出てゐる。

『あゝ、何といふ不幸であらう、自分は神のため商賣もやめ、妻子にも別れて眞正直にくらして來たが、今日までの所は不幸續きである、ことに今夜は祈禱會の留守に泥棒に品物をとられ、おまけに負傷までするとは神も佛もないものか』

と思つて、心の中は急にまつくらになつた、が然し、忽ち思ひ返した、汝は汝の財産を棄てたことを誇るか、汝の財産は青年子女の靈魂を墮落せしめ、多くの家庭

の平和を破り多くの人の家産を傾むけて得たところの惡錢ではないか、けふ泥棒にとられたのは神がその不義の財を棄てさせたのであると思つた、それでこそ神は正義の神であると彼は思ひかへして、却つて感謝し、一層信仰生活をはげんだと云ふことである。

神の正義が、他人の不義を打つときにはその正義を認めるが、自分の不義を打たれるときには、心闇んで却つて是を怨むものである。

六　運命の恩寵

斯やうなる苦き運命も盲目無意義のものではなくて、そこに神の正義の發現を認むれば、むしろ感謝して服從することも出來るのである。

メリー・リード嬢は米國の富豪に生れ高等の教育を受けた妙齢の處女であつた、一生神の使命を感じて印度に行つて傳道してゐたがある時ヒマラヤ山中の一地方へ行つたときに、其邊一帶に五百餘人の癩病患者がゐて悲慘な狀況であることを見て、いたく同情を寄せてその介抱につとめたことがあつた。

其の後自分も病氣になつたので休養のため本國へ歸つて、醫師の診察を受けたがどうも病性がはつきりしないばかりでなく、なか〳〵良好と云ふ所へ行かなかつた。

ことに怪しかつたのは右の手の食指にたえず疼痛のある事と、後になつて頰の耳に近いところへ一つの班點を生じたことであつた。

ある日、リード嬢はヒマラヤ山中に於ける悲慘ある病人の夢を見て、自分の病の何であるかを大體察してゐた。

そして癩病專門の醫師の診察を受けたところ、果して癩病であることに確定した。

然しリード嬢は別段驚きもしなければ、悲しみもしなかつた、又絶望も落膽もし

なかつた。

是れ自分をして世にも哀れなる癩病者のために盡さしめんとする神の攝理、卽ち運命の然らしむる所であると悟つて、反つて希望に充ちた顏で、

『神よ御心の儘になさしめ給へ』

と、喜んで運命に服從した。

然しこの事を父母に知らせてその悲しみを見るに忍びず、ひそかに妹に打ちあけた外は誰にも話をしなかつた。

そして幸福なる家庭を捨てゝ、人生のもつとも悲慘なる境遇にある癩病患者の母とならんがため、再度と生きて返るまじといふ決心を固めて印度にむかつて出發した。

『接吻を……』

と、父母から望まれたが、恐ろしき病氣の傳染を恐れたが、さりとて本當のことも打ちあけかねたので、

『何の、別れといふても一年か半年、すぐ歸るのですから』

と、さりげなく言ひ流して別れてしまつたが、心の內ではもう生きて父母には逢はれぬと云ふ苦痛を隱して、海拔六千四百尺のヒマラヤ山中に行つた、そして癩病患者のために道を說いた。

然しリード孃は後にこの事を父母に打ちあけて、

『決して過ち玉ふことなき我等の天の神は、限りなき愛と智惠とを以て私を選んで堅忍、耐久、及び順從の敎訓を垂れ玉ふ』

とかき送つたとの事である。

リード孃の如きは眞に運命の恩寵を知つて、これを樂しむ偉大なる幸福を享受した人と言はねばならぬ。

七　運命の眞意義

運命に服從することは、神の愛に順從し、その深謀遠慮の經綸を行ふのである かくてこそ到底運命に服從せねばならぬ運命を持つてゐる人間も眞に幸福となり得られるのである。

順境に逢ふと忽ち浮華樂觀に傾き、逆境に逢ふと忽ち怨む、滔々たる常人は論ずるには足らぬ、學者、佛家、悟道家、宿命論者の運命觀は、たゞ論理を構へて智識を滿足せしむることは出來るかも知れぬが、決して感情を滿足せしむることは出來ないのである、むしろ感情を殺して意志を萎縮せしむるに過ぎぬ。

順境に今あるところの人々も、その運命がいつ回轉するか分らぬことを考へよ その時狼狽して失望せぬやう、須からく運命の眞意義を明らめて置く可きである。運命の眞意義を知つて順逆共に感謝することを知つてゐれば、逆境必ずしも不幸ではなく、順境の幸福はいよ〳〵增加するのである。

又、今逆境にある者も然りである、苦き運命の皮をはげば甘き恩寵のあることを知らねばならぬ。是が卽ち運命の眞意義である、パウロ、羅馬人に書を與へて敎て曰く、

すべての事は神の旨に依りて召されたる神を愛する者のために悉く働いて益をなすなり（八章二十八節）

又テモテ前の書に敎へて曰く、

神の造りしものはみな美なり、感謝して受くる時は、捨つ可きものなし（四章四節）

眞に然りである。

路傍一片の草も一塊の土石も、みな働きて益をなすのである、況んや人間をやである、人間の受くる運命をやである。

順を變じて逆となすのも、逆を轉じて順となすのも、要するに順逆それ〴〵の道に處する人々それ自身が、運命の眞意義を知るか知らぬかにあるのである。運命の眞意義を徹底的に知らうとするには、尙ほ、修養が必要であり、信仰が大切であり、それに伴ふ生活、家庭、人格、生命と云ふやうな細かいことに就ても、以下章を改めて說いて見たい。

第七章　信仰論

一　人間の至情

本當の意味に於ける幸福は、富貴の階級的差別に依るのではなくて、信仰を以て運命の眞意義を明らかにし、逆境を感謝し順境に奢らざる生涯を送る人の享受すべきものであることは、前章以來縷述した所である。

然り信仰のあるところには、如何なる運命も、何人の生涯もみな善であり幸福である。

然らば卽ち信仰とは何であるかに就て述べるのも强ち無用の業ではあるまい。人間誰でも信仰のない者はない、信仰は人間の至情である、そして又信仰の力程恐ろしいものはない。

ステヽノは石で打ち殺されながら尙ほかつその信仰を捨てなかつた、基督は十字架につけられてその命を捨てる間際にも尙ほ神に對する信仰を捨てなかつた、英國近世の名將ゴルドン將軍はアビシニヤ王の威嚇を物ともせず毅然として、

『余は毎々死ぬる覺悟をしてゐるから、陛下が余を殺し玉ふとも決して恐ろしいとは思はぬ、かへつて信仰を守るがために殺されることを感謝する次第である、余は宗教上の遠慮のために自殺をせぬ位であるから今陛下に殺されゝば今後一切の困難から救ひ出される譯で反つて安樂である』

と、言ひ放つた位である。

マルチン、ルーテルにしても、ジヤンダルクにしても、その信仰のためには命を捨つることは何とも思つてゐなかつた、斯やうな例は世の中に澤山あるのである。

女は髪の毛を殊に大切にする、然し信仰のためにはその髪の毛を根元からきつて終ふものも多い。

或は掌へ油を注いで燈明を點じたり、或は罪亡ぼしだと言つて膝頭で何百里もあるつたり、死ぬかはりに現在の苦痛をなめる者もある。

財産はものかは、苦勞はものかは、二つない命を的にしても厭はないと云ふのが信仰といふものゝ本當の狀態である。

人間の信仰は力の強いものはない、虎と見て石に矢の立つためしもある、さうかと思ふと、又一方には、若いときは血氣の勇に任せて、氣儘勝手を行ふものもある。

無我無中で威張くさつて、神を知らず信仰を知らず金力をたのみ權力により腕力をことゝする者もないでもない。

然し左樣いふ者であつても一旦病氣になるとか災難でもあると、神佛へ手を合せたり家内に病人でもあれば急にお百度を踏んで見たり、今まで石を投げた教會の門も潛つて見るといふ氣になるものだ、して見ると人間の信仰といふものは爭へない

至情である。

無神論者も夜中には神のあることを信仰するといひ、又は東洋の俚諺に困つたときの神頼みといふのは是である。

然し幸福な順境時代家内繁昌、何不自由もなく暮してゐるときは一向信仰心もなく、さて病氣したり、貧乏になつたり、不幸に逢つたときに信仰をはじめるのはうろたへた話である。

丁度雨漏りがしてから屋根ふきを始めるやうなものだ、人間は雨漏りのせぬうちに屋根をつくろつて置かねばならぬと同様、病氣や不幸のない前にしつかり信仰の目標を定めて置かねばならぬと思ふ

あゝ神よ、鹿の谷川の水をしたひ喘ぐが如く、わが靈魂もなんぢをしたひあえぐなり、わが魂はかわける如く神を慕ふ、何れのときにをわれ行きて神のみ前に出でん。

と、詩篇の四十二にある如く、人間の信仰は鹿の谷川の水にしたひよるが如き、天然自然の情である。

さり乍ら我々人間の信仰すべきものは何であるか、勿論富の力ではない、權力でもない、さりとて腕力武力でもない。

鰯の頭も信心からと言ふが何でも信仰していゝと云ふ譯のものではない、信仰に依つて運命の眞意義を明らかにするのであるから、運命そのものを左右し得る力のあるものでなければならぬ、佛教か、基督教か、はたまた科學の力であらうか。

二　信仰の目標

人間の運命を左右し得られる力が若しありとすれば、それは人間を作つたものであらねばならぬ。

然して同時に人間の住む此の宇宙も亦その絶對の能力に依つて作られたものと見

なければならぬ

人間が信仰に依つてその運命を善意に解釋して行かうとするには、やはり前提としては人間を作つた者の存在を認識せなければならぬ、人間を作るものは富でなく權でなく、宇宙を創造した絶對の第一人であらねばならぬ

それ宇宙と其中の萬物を造り給へる神は是れ天地の主なれば手にて作ける宮に住み、玉はず、かつすべての人に生命と呼吸と萬物を與へ玉へば物に乏しきことなし、人の手にて仕へらるゝ者にあらず、また此の神は凡ての民を一つの血より作り、悉とく地の前面に住せ豫じめ其時と住むところの界とを定め給へり、此の人をして神を求めしめ、彼等が或は探り得ることあらん爲なり、されども神は我々各人を離るゝこと遠からざる也、それ我らは彼によりて生き、又動き又あることを得るなり。

と、新約聖書の使徒行傳十四章には斯んな一節がある、宇宙と其の萬物を作つたものは神である、しかして凡ての人に生命を與へるものも神である、人間は神に依りて生き、動き、かつあることを得るのである。

此の世界を見れば日月の運行、山川の推移、草木の榮枯、鳥獸の生死、何れも秩序があり、順序がある。

何らかの力があつて其の力の命ずるが儘にそうした變化があるのではないかと考へられる。

それを自然の力であると言ひ切つてしまふのは、餘りに意義の少いことである、然り聖書は

元始に神天地を創り玉へり

と敎へてある、又

人の見ることを得ざる神の限りなき能力と、その神性とは、造られたるものに依りて創世より以來悟り得て明らかに見ゆべし

とある、鷄は卵から生れ、卵は鷄から生れる、然し最初の鷄は如何して造られたのであらう。

われは我父の子である、我父はわが祖父の子である、わが祖父、その父、その祖父、然して人間の祖先は誰であつたか、忽焉として此の世に生れたわけでなく、天地を作つた神によつて作られたものであらねばならぬ。

米國最初の大統領ワシントンが幼時の逸話は、此の事實を示す適例として多くの人々の口に傳へられてゐる。

ワシントンの父はある時、裏の畑を耕やし、そのあとへ草の實を、ジョージワシントンといふ名前の文字通りに蒔いておいた。

間もなく種は生えて青々と芽を吹いたのは、ジョージワシントンと云ふ文字其の儘である。

ワシントンは是を見て驚いて父の許に來てきいた、

『父さん、どうして彼樣ふうに草が生えたのでせう、草が偶然に生えるわけはありませんが、誰が蒔いたのでせう』

これをきいて父は笑つて、

『お前は草がちよつと其の名前の通りに生えてもこれは偶然ではない、誰かゝ蒔いたのだと思ふのではないか、此の天地萬物が偶然に出來たと思ふか』

と言つたのでワシントンは幼心に神の存在を會得したと云ふ。

然し、神とは何であるか、成る程机を拵へた大工がなければならぬ、卵を生んだ鷄がなければならぬ。

大工も鷄も人の目に見える、然し人間を作つた神は目に見えないではないかと云ふ者がある。

然り神ハ無形的

エネルギート云ハン

われ〳〵人間は自分の心さへも目に見ることは出來ないのであるから、もちろんわれ〳〵を作つた神の姿を見得ざることは當然すぎる程當然である。

然し人間に心のあることは、人間の心が働きとなつて現はれるいろ〳〵の仕事を見ても分る如く、神の存在は、その神の力の發現とも言ふ可き四季自然の運行、草木の春に花を開き、秋冬實を結ぶ狀態に鑑みても分る筈である。

茲にひとつの挿話がある、或る時米國の土人の家へ一人の泥棒が入つて梁にかけてある牛肉を盜んで行つた、間もなく、主人の土人が歸つて來て、此の樣子を見ると、

『これはきつと背の低い年老つた西洋人で、尾の短かい小犬を連れて居り、手には鐵砲を持つた男の仕業に違ひない』

と、あとを追ひ掛けて行つたが、間もなくその通りの西洋人に逢つて、盜まれた牛肉をとり戻して歸つた。

そこで、近所の人々が、どうして斯う早く盜賊が分つたか、不思議であるといふので、

『どうしてお前さんは見もしないでそんなに明白に盜賊の樣子が分りましたか』

と聞くと、土人は笑つて、

『何、それはわけはない、あの梁の肉を下すために踏み臺を使つた形跡のがあるから泥棒は背の低い者であることが分つた、又表の砂の上の足跡のせまいのを見て老人だと云ふことが分り、その外踏みなので西洋人であり事がわかり、壁に筒口を寄せかけた所があるので、鐵砲を持つてゐたことを知り、埃の中のかたを見て尾の短かい犬を連れてゐることを想像した譯である』

と言つた。

丁度此土人が目に盜賊を見なくつても、その場の樣子を見て、盜賊の人品、風體所持品までもよく分つた如く、われ〳〵人間は目に神を見なくも、天地萬物の狀態四季自然の妙用を見て、これを作りこれを左右するところの神の力の廣大さを知らねばならぬ。

卽ち天地萬物の廣大なことを見ては神の廣大なることを知り、四季自然の妙用、人體構造の不可思議さを見ては神の智惠を思ひ、善き者にも惡しき者にも一樣に日を照らし、雨を降らせる所を見てはその愛の廣さを思ひ、人間の心に是非善惡判別の力を與ふるところを見ては、神の正しきことを知るのである。

信仰を以て運命の意義を明らかにするといふのは、人間を作つた神を信じ、神の愛を信じ、愛の神が自分のつくつた人間に與ふるの運命を、いかなる場合にも惡でないと言ふことを知るのである。

三　神の愛によりて

眞に然りである、一軒の家に一人の主人あるごとく、一村に一人の村長ある如く一國に一人の君主がある如く、此の世界はこれを作りこれを支配するところの神がなければならぬ。

人間の思想界を支配するところの神がなければ、人間生活の平和は保たれないのだ。

一家の平和は主人の力により、一村の自治は村長により、一國の政治は君主によつて、各適當に維持される如く、世界の平和は人間のすべてを作り、人間のすべてが信仰する神の力に依らねばならぬ、よくわれ〳〵自身のことを考へてみれば、神が智惠に滿ちてゐる如くわれ〳〵も智惠を持ち、神の正しきが如くわれ〳〵人間も是非善惡を判斷することが出來る。

神が愛なるが如くわれ〳〵人間も愛の心を持つてゐる、われ〳〵の心には神の姿かゞ宿つてゐるのである。

その殘つてゐる神の働きが人間の善となり、愛となり、公益となるのである。

天地を造つたところの神が、如何に此の世の人間を愛してゐるかは、丁度赤ん坊が母親のいつくしみ深き保護を受けてゐるやうなものである、今日如何なる學者で

あつても大權力者であつても、何にもないところから茶碗へ一杯の水を作ることは出來ぬ。

然るにわれ〳〵人間は朝起きて顔を洗ふから夜の入浴まで、手を洗ふにも、咽をうるほすにも、洗濯にも、掃除にも、此の貴とき水を惜氣もなく用ふるのである此の水は井戸にあり川にある。

さりながらその井戸の水川の水は自然に地から湧いたものであらう、が、その地はどうして出來たか、詮じつめれば此所にも尙神の力が働いてゐるではないか、又われ〳〵人間の食糧とする米麥の類でも、種をまけば生え、或は雨露、あるひは晴雨の關係が適當に按配されて、自然と實を結ぶやうになつてゐるのは何故であらうか。

如如に百姓が汚水垂して働いても天地自然の妙用が茲に至らしめなければ、斯う都合よく行くものではない。

此の天地自然の妙用は神の偉大なる力の發現である。

ある時一人の傳導師が、田舍道を通ると藁ぶきの家の中から祈禱の聲がする。神よ、あなたはいろ〳〵御惠みを下さしたのみならず、今また斯やうな結構な物を頂戴して有り難う御座いますと、如何にも嬉しさうな聲なので、何をそんなに有り難がるのかと思つて覗いて見ると、一人の老人が一杯の冷水をテーブルの上にをいて祈禱をしてゐたと云ふ、味はふて呑めば一杯の冷水の中にも大なる神の力がこもつてゐる、一本のマッチにも、神の力が働いてゐることを、われ〳〵は忘れてはならぬ。

四　信仰の意義

然らばその神を信ずるには如何したらいゝのか、多くの品物を備へたらよいのであらうか。

神を信じて、神の力を受け、運命の眞意義を明らかにして、平等の幸福を享受するには、何か神に對する供へ物乃至は賽錢のやうなものが必要であらうか、否目に見えざる神は、品物や金のやうな供物を受くることを欲しない、人の心を支配する神は、やはり人間の心からの禮拜と信仰とを欲するものである、聖書に、

眞の拜するもの、靈と眞を以て拜する時來らん、今その時になれり、夫父は是の如く拜する者を求め玉ふ、神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をして拜す可きなり（約翰傳四章）

とあるが如く、又

空しき祭へ物を再び携ふる勿れ、燻物はわが惡むところ、新月を呼び安息日、また會衆を呼び集むることもわが惡むところなり、汝等は聖會に惡を兼ぬ、われ容すにたえず、我心は汝等の新月と節會とを嫌ふ、これわが重荷なり、われ負ふに倦みたり、われ汝らが手をのぶる時目をおほひ、汝等がおほくの祈禱なすときも聞くことをせじ、汝の手には血みちたり、汝等己れを洗ひ己れを清くし、わが眼の前より其惡しき等をとり去り、惡を行ふことを止め、善を行ふことをならひ、公平を求め、虐げらるゝ者をたすけ、孤兒に公平を行ひ、寡婦の訴をあげつらへ（賽一章）

とある如く、空しく祭物を携ふる勿れである、たゞわが目の前より惡を去り、善を行ふことを慣ふ可しである。

ある時二人の男が同じ神の宮に行つて神に祈禱をした、その一人はパリサイの徒であり、一人は稅吏であつた。

パリサイ宗は信心自慢の宗教であるが當時の稅吏は今日の高利貸の如きものである、此の二人が連れ立つて神の宮に祈禱に行つたと云ふことが既に不思議であつたが、神がどつちの願をきゝ入れたかと云ふことも、また不思議な結果であつた。

「神よ、私は强慾不義をせず又不身持な行爲もせず、一週間に一度づゝ斷食いたし

又、此所にゐる税吏のやうな無慈悲な事は致しませぬ」

と、パリサイ宗の信者は聲高らかに誇らしげに言つた。

然し税吏は既往の罪を深く後悔して、恥ぢかへり神の咎めを恐れて顔をあげることも出來ず、涙と共に腹の底から

「神よ、罪深き私を哀れみ給へ」

と祈つたのである。

神は果してどちらの祈禱を聞き入れたが、神は人の心の奥底を察する全能をもつてゐる。

パリサイ宗徒の傲慢なる高ぶりたる祈禱よりも、税吏の正直な、眞面目な懺悔を喜んで聽き入れたのである。

天地をつくり、人間の心を支配する神、人の目に見えざる心を支配する程の神は見えざる所なく、知らざる所なき、正しく清き神である。

故に此の神の定むるところの運命の眞意義を知らうとするには、惡を思ふてはならぬ。不善を行ふてはならぬ。何所までも清く正しき神の心に叶ふところの生涯を送らねばならぬ。

神を敬ひ、畏れ、その心に叶ふところの生活を送る者にして、はじめて運命の眞意義は分るのである。

かやうな人の運命は不幸の如く見える場合も、尙ほかつ幸福であると感ぜられる所の或る力を享受し得られる、否、不幸を轉じて幸福とするところの力をも感受し得られるのである。

五　信仰の力

人間の運命を支配する神の存在を認め、これを信仰することに依つて、即ち運命の眞意義を知つて信仰の生涯を送ることに依つて人間が如何なる幸福を受けるかと

云ふことに就て少しく言を費やして見たい、聖書に曰く、

神はわが牧者なりわれ乏しきことあらじ、エホバ(神)はわれを綠の野にふさせいこひの水際に伴なひ給ふ、エホバはわが魂を生かし、名の故をもて我を正しき道に導き給ふ、たとひわれ死のかげの谷を歩むとも禍害をおそれじ、汝われと共に在せばなり、なんぢの笞、汝の杖、われを慰さむ、汝わが仇の前にわがために筵をまうけ、わが首にあぶらを注ぎ給ふ、わが酒杯はあふるゝなりわが世にあらん限りはかならず恩惠と憐憫とわれ添ひ來らん、われは永久にエホバの宮に住まん(詩篇二十三)

吾人の説明を俟たず、この一句を讀めば轄然として大悟するところがあらう、エホバはわが牧者である、然り神は人間の牧者である、牧者がその牛、その羊を大切に飼ひ育てゝ成るべく丈夫に、なる可く愉快にするのと同じく、神はわれ〳〵人間を乏しきことあらしめざるやう育くみ給ふのである。

山を見よ、野を見よ、川を見よ、海を見よ、鳥も獸も水も草木も、すべて人間の生活を乏しからしめぬために神が豫じめ備へておいたのである。

人間世にある限り、神を信ずる限り、この惠と憐憫とが添ふてゐるのである、エホバを感謝せよ。

さり乍ら神を信ぜざるものは、此の見やすき道理をすらも知り得ない、從つて、悲觀、苦痛、哀愁の世を送るのである。

不幸に逢ひ、失敗をするときにも尙ほ此の天地自然の恩惠だけが、明らかにわれに殘つてゐることを知らないで神も佛もない如くに浮世を果敢なむのである。

神の力を知り、神の支配を信ずるものは、いかなる失敗にあひ、困苦に遭遇しても、自分は裸體になるやうな不遇に陷つても、尙ほ天地自然の恩惠と神の憐憫との殘つてゐることを知つてゐるから、決して失望しない、悲觀しない、然して中道にして挫折しない。

再起、三轉、倒れて止まざるの覺悟があるから、不幸も轉じて幸福となし得ることも出來、又不幸が必ずしも不幸でなく、神が自分を大成するために、完全なる人間とするために、種々の艱難辛苦を與へて、試練研磨するものであることを悟るのである。

荒けづりの細工にいく度かの仕あげをかけて大理石像が完成するやうに、人間はいく多の苦痛失敗といふみがきを掛けて、はじめて、完全なる人間となり得るのである。

世の中には決して完全な人間はない、神の前には何人も不完全である、われ〳〵は神の試練を受けて完全なる域に達すべく、信仰の生涯を續けねばならぬ、然して最後の勝利を得るのである、勝利の幸福である、罪と、情慾と、利益と、不幸と、失敗と、逆境と、苦痛と、あらゆる惡の名に打ち勝つて幸福の世界に住むやうになるのである。

聖書に曰く、

およそイエスを神の子と信ずる者は神に依つて生れたるなり、およそ是を生むものを愛する者は亦その生るゝ所のものをも愛するなり、われ等もし神を愛してその誡を守らば是によつてわれ等神の子供を愛すと知る、神の誡を守るは卽ち神を信ずるなり、その誡は難からず、凡そ神によつて生るゝ者は世に勝つ、われ等をして世に勝たしむるものはわれ等が信なり、誰かよく世に勝たん、イエスを神の子と信ずる者にあらずや（約翰傳五章）

何故にイエスを神の子と信ずる者が世に勝つか、信仰の目標は神に在りと上來叙述して來て、茲に於て何故神の子と云ふ文字を使用せねばならぬか、神と神の子とは果して如何なる相違があるか。

然り、神を信ずるのみではまだ力が薄いのだ、イエスを神の子と信ずるのでなければ本當の信仰に達したとは言はれぬ、信仰の奥義に達したとは言はれない、項を

改めて次に此の意味を叙述しやう。

六　神の子イエス

基督が何故に神の子であらうか、彼はユダヤの國に生れた田舍大工ヨセフの子である。

人の腰をかける椅子もつくれば土足で踏まれる床も張つた、そして汗水流して稼いだが、三十の年に自分の神の子なることを悟り、福音を說いて病人を癒し苦しむ者を慰め、ことに神が人間を作つたこと、然して人間の運命を左右することを敎へ三年の後十字架に死んだのである。

それが神の子イエスの短かい生涯である、神は何故その子のイエスと云ふ人間の像で此の世に現はしたが、右に就て聖書に曰く

汝等基督の心を以て心とすへし、彼は神の形にて居りしかども、自らその神と等しく在るところの事を棄て難きこと丶思はず、反つて己を空しうし僕の形をとりて人の如くなれり、既に人の如き形狀にて現はれ己を卑くし死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり、此の故に神は甚しく彼を崇めて諸名に勝る名を與へ給へり、此は天にあるもの地にあるもの、及び地の下にあるものをして悉くイエスの名によりて膝を屈ましめ、かつもろ〳〵の舌をして悉くイエスキリストは主なりと言ひ現はして、父なる神に譽を歸せしめん爲なり（ピリピ書二章）

敎育學の大家として世界に名の高いペスタロッヂは、曾つて、

「余は乞食の子を救ふために自分から乞食のやうな生活をする」

と言ふたことがある。

またある婦人はその十二歲の時に、一人の酔漢が警察署へ引かれてゆく後から、多くの張次馬が罵りさわぐ有樣を見て氣の毒でもあり哀れでもあつたので、せめて

は廣い世界にたつた一人でも此の酔漢に同情を寄せてゐる者があることを知らせやうと思つて、つか〳〵とその男のそばに近寄り巡査がその左にゐたので、少女は右に添うて警察まで送り屆けたと云ふ、此の少女は、後のカザリン・スース夫人である。

また白痴教育の大家リッチャードはある時、一人の母親が二階の窓からその兒が庭で悪戯をしてゐる所を見つけたが、すぐに大聲をあげては叱らないで、却つて靜かに二階から降りて來て庭へ行き、兒童のそばへ寄つて靜かにその非をさとして居るのを見て、白痴を教育する極意を悟つた。

またある人は自分は役所づとめをして五六人の孤兒を養つてゐた、その孤兒には遊ばせをつても仕方がないと云ふので靴磨きをさせてゐた。

然し孤兒たちは一向勉強はしないで腰辨當で遊んで歩くばかり、偶に一錢でも二錢でも儲ければすぐに買食をしてしまふと云ふ風であつた。

ある夜子供たちの寐物語を聞くと、お父さんは官員さんでゐらいが自分たちは靴みがきで詰らない、自分たちも官員になりたいと言つてゐたので、あゝ悪かつたとすぐその翌日役所をやめて自分も一所に靴みがきをはじめた。

頑是ない子供もこれに感じたかよく働くやうにもなり勉強もするやうになつたと云ふことである。

是等はたゞ一場の例話である、然し孤兒を養育するには孤兒同様に働き、乞食を救ふには乞食と共に生活し、無頼漢を救ふにはこれと共に歩み、子供を教へるには子供の相手となることが必要である。

神が、人間の運命を支配し、人間の信仰を得て、人間を導びいて行かうとするには、やはり人間の姿となつて此の世に現はれねばならぬ、それが神の子イエスである。

故に神を信ずると云ふことは、百尺竿頭一歩をすゝめて神の子イエスの降誕をも

信じなければならぬ。

然り、目に見えぬ神の満ち足れる德は悉くイエスキリストに現はれてゐる。われ〳〵は神を見ることは出來ぬ・併し神の子イエスは言葉と行爲とに依つて、神とはどんなものであるかを知ることが出來る。

此のキリストの救といふことが、佛敎よりも、儒敎よりも、基督敎の力ある所以である。

誰かよく世に勝たん、イエスを神の子と信ずるものにあらずやと云ふ意味はそこにある。

七　三敎の比較

玆に、基督敎と佛敎と儒敎との三つを比較した面白い話がある。

浮世の旅路に彷徨ふて罪惡と艱苦の深い井戸に落ちて苦悶してゐた者があつた、ぐづ〳〵してゐれば死んで終ふので、大聲をあげて救を呼ぶと、丁度そこへ通り掛つたのがお釋迦樣であつた。

上からちよつと井戸を覗いて、

『これ〳〵如何したのだ、うん井戸の中へ落ちたのか、どうもそりや仕方がない、前世の因果でさういふことにもなつたのだから、よく〳〵其所の道理をわきまへて諦らめて往生したがよい』

と言つた。

助けて呉れるかと思ひの外その儘立ち去つてしまつたので、これでは不可と又も大聲をはりあげて助を呼んでゐると、次へ通り掛つたのは孔子である、井戸をのぞいて見て、

『人間といふものはうか〳〵して居ると何時でも左樣いふところへ落ちるものだ、お前も今後は、よく〳〵注意して、一度落ちた井戸へ二度と入らぬやうにしたがよ

い」

と敎へた儘何所かへ行つてしまつた。

何だか二人とも最もらしいことを言つてると思つて聞いてゐたが、時が經つに從つて考へて見ると話をきいたばかりではいけない、先づこの井戸から上らなければならぬが、如何しても自分の力では這ひ上ることが出來ない、そこへ駈けつけたのは基督である。

物も言はずに長い梯子を井戸の中に下し、丸裸になつて、自分から水の底まで下りた。

そして疲れ果てた其の男を引き起し、後から押すやら前からひつ張るやら、色々にして井戸から救ひあげ、藥をのませ、傷を洗つて療治もしてくれ、やがて元氣の恢復したところで、これまでの不注意を戒しめ、今後の心得に就て述べた。

これは一場の例話に過ぎぬが簡略に、しかも明瞭に三敎の比較說明をしてゐると思ふのである。

斯の如く神の子イエスは、人を救はんがために、人間の像となつて地に生れ、あらゆる辛苦をなめたあげく十字架上に死んだのである。

フランスにテレサと云ふ基督敎信者があつた、一錢の金を資本に孤兒院を建てたテレサと一錢の金は無に等しいものである、然し神を信ずる信仰のみは天地を自由にすることが出來ると言つた。

われ〳〵人間は弱くして罪多きものである、然し信仰によつて罪を救はれ、力を與へられて淸く强くなり得るのである、一切を信仰に依つて行ふのである、われの力ではない、神の力である、世界に恐ろしいものはないわけである、何故ならばわれ〳〵の信ずる神は天地をつくり、然して人間の運命を左右するのである、その神を信ずるわれ〳〵は安んじて生活し得られるのである、貧しくとも幸福であり、弱くとも强い。

メソヂスト派の開祖ウエスレーは、その死ぬと云ふ人生の不幸のどん底にありながら尙ほ感謝して、

『私の死は幸福である、何故ならば神は私と一所にゐるからである』

と言つた。

神を信ずる者には、神はいつもその人と一所にゐる、天地を支配する神と一所にゐる程力強くかつ幸福なことは世の中にはない。

八　信仰と幸福

然り、神の存在を信じ、これに一身の安危を任せ信じてゐる者は幸福である、母はその人を守り、その人の運命をして安からしめるからである、聖書に曰く

何事をも思ひ煩ふ勿れ、たゞ事毎に祈禱をなし、懇求をなし、かつ感謝して己が求むるところを神に告げよ、神より出でゝ人のすべて思ふところにすぐる平安は、汝らの心と意を基督イエスに依りて守らん（ピリピ書四章）

又曰く

求めよ、さらば與へられ、尋ねよ、さらば逢ひ、門を叩けよ、さらば開かるゝことを得ん、そはすべて求むる者は得、尋ぬるものは遭ひ、門を叩くものは開かる可ければなり、汝等のうち誰か其子パンを求めんに石を與へんや、又魚を求めんに蛇を與へんや、さらば汝等惡しき者ながらよき賜物を其子に與ふるを知る、まして天に在す汝等の父は求むるものによきものを與へざらんや（路加傳十一章）

然り、求めよさらば與へられんである、幸福を求むるものに幸福を與へるのは神の力である。神を信ずる者の特權である。

キリストは弟子に敎へて、求めよさらば受けん、然して汝等の喜び滿つべしと言つたのはこの意味である。

ルーテルは、義人は信仰によりて生く可しと云ふ聖書の一句に感じて、遂にあの宗教改革の大事業をなした。

ウキルバーホースはこの戰はわが戰にあらず神の戰なりと言つて社會改良の大事業を成し遂げた。

信仰に依りて事業をなす者は、自分の力以外の力を得て、相當以上の働きをなし得らるのである、望外の幸福を享受し得られるものである。

英國のクロンウエルは、戰爭の時にはきつと聖書の詩篇をよみながら進軍したがその部下にはきつと一冊づゝの聖書を持たせてゐた、ある時一人の部下の兵士は軍から歸つて來て、

『けふは慥かに何所かへ鐵砲が當つた筈だが、よくまあ怪我をしなかつたものだ』

と言ひながら自分の身體を調べてゐると、大將クロンウエルから貰つた聖書が、黑焦になつてゐた。

尙よくしらべると彈丸はその聖書を表紙から打ち拔いて、丁度その中程の傳道の書第十二章で留まつてゐた、そこには

汝の若き日に汝の創造主(卽ち神)を覺えよ。

と書き起してあつた。

これを見たその兵士は自分は信者ではなかつたが、急に神を信ずる氣になつて、以來熱心な基督敎信者となり、幸福の生涯を送つたと云ふことである、たゞそれは偶然のことに違ひない、然し不信者をも尙ほかつ幸福に導く神が、信ずる者に幸福を與へぬ筈はない。

米國の大統領リンコルンは見るかげもなき片田舍のあばら屋に生れ、さまざまの辛苦をなめつくして大統領にまでなつた人であるか、彼は熱心なる基督敎の信者であつたが、彼がこんな偉大な人物になつたのはその子供の時、母が

『お前が千町歩の田地を持つよりも聖書一冊をもちよく讀み味はつてキリストを信

じて呉れた方がどんなに幸福だか知れない』

と言つた言葉に基づいて神を信仰し、すべてを神に任せて、神の心に叶ふよき生活を送つたからなのである。

われ等神を愛するにあらず、神われ等を愛して我らのためにその子を遣はしてなだめの祭物となせり、これ卽ち愛也。

と聖書にある、神を信ずる者は、神のゆたかなる惠を受けて、世の戰に打ち勝ち、幸福を受けて、安らかに、樂しき月日を送つてゆかれるのである、ダビテ王は

我は惡の家に榮耀榮華に暮さんよりは貧しくとも神の殿堂の門番たらんことを欲するなり。

と言つた。

不義にして富めるよりは、貧しくとも正しい道を踏んで行くことがどれ程幸福であるか分らぬ。

ジョンブライドは英國の大政治家である、然し彼は、貴顯紳士を招待して夜會を催したり、又は宴會などによばれて行つて觀待されるよりは、日曜日ごとに會堂の入口で入りくる人々の接待をしてゐる方が幸福だと言つて居る。

力ある者も、弱き者も、富める者も、貧しき者も、神に於ては何の變りもなく幸福を與へる。

要するにその心を開いて、神を信ずる者は、より多く、その力を受け、惠を受けるのである。

心を空しうして、つまり邪念惡想を去つて神を信じれば、神の愛とめぐみは、その空しき心を滿たし玉ふのである。

九　信仰と生活

然らば、職業などはそつちらかして神さへ信仰してゐればよいかと云ふと、決し

て左樣ではない、使徒パウロは、

汝等働くことを欲せずば又食ふ可からず。

と言つた、自分は天幕を作つて傳道した、古來信仰の厚いものは、みな生活のため自分の職業を勉强した、人一倍勉强した、キリスト自身は大工であつた。

人間の身體にたとへて見れば目もあり鼻もあり、手足もあり耳口もあり、いろいろがそなはつて完全に人間としての仕事がして行ける如く、此の社會もまた官吏公吏實業家教員農夫等があつて、いろ〳〵の方面からお互ひに助け合つて社會の秩序を保ち完全に生活をして行くのである。

智慧のちがふのも、力の强弱も、貧富の別も、何れも神が按配よく此の世を治めてゆくやうに拵らへたものである。

貧しき者と富める者と共に世に居る、これを造りしはすべて神なり。

と聖書にある如く車を曳く者があれば乘る者がある、雇ふ者あれば雇はるゝ者あり、米を作るものあれば買ふ者あり、何れが貴く何れが賤しいとは言はれぬ、各自お互の立場から社會のために盡すので、人間の高下はその職務に忠實であるかないかに依つて區別が出來る。

勞働は人間にとつては罪の報ではなくて神の祝福である、重荷ではなくて快樂である、厄介なことではなくて感謝すべき仕事である、神を信じて自分の職業のために働くものは、たとへその身は貧しくとも他人の思ひ及ばぬ幸福がある。

少しの物を持ちて神を敬ふは、多くの寶をもちて煩ひあるに勝る、野菜を食ひて互に愛するは、肥えたる牛を食ふて互に恨むに勝る（箴言）

と言ふてある。

眞實の幸福は金持や權勢ある人の胸には宿らぬ、何はなくとも神の前に忠實にその職分を盡す人々のみが受くべき特權である。

のみならず、神を信じてその職業に忠實なるものは自然その生活も貧乏の程度か

ら脱れ得られるものである。

米國カナダの材木王、ギブソン氏は、水車小屋の小僧から身を起して、二百八十哩の鐵道を持ち、五千二百町歩の森林を有する富豪であつたが、ある人がその富を得る方法を問ふと

第一酒を呑まぬこと、第二一生懸命に働くこと第三に神を信じて天命に任せることである。

と言つた、その位のことは誰でも知つてゐるではないかと言ふと、ギブソン氏は三歳の兒童もこれ位の理屈はよく知つてゐる、然し六十歳の分別男も行ひかねるものであると答へたと云ふが面白い話である。

人は二人の主に事ふること能はず、そは是を惡み彼を愛くしみ、これを親しみ彼を疎むべければなり、汝等神と貨にかね事ふること能はず、是故にわれ汝等に告げん、生命のために何を喰ひ、何を飲み、また何を衣んと思ひ煩ふこと勿れ、生命は糧より勝り身體は衣より優れるものならずや、空の鳥を見よ、稼ぐことなく穡ることなく、食に蓄ふることなし、然るに汝等の天の父は是をも養ひ給へり、汝等これよりも大に勝るゝものにあらずや、汝等のうち誰か思ひ煩ひて命を寸陰も延べ得んや、又何故に衣のことを思ひ煩ふや、野の百合は如何にして長つかを思へ、勞めず紡がざるなり、われ汝等に告ん、ソロモンの榮華の時だもその裝ひ此の花の一に及かざりき、神はけふ野にありて明日爐に投げ入れらるゝ草をもかくよそはせ玉へり、まして汝等をや、あゝ信仰うすきものよ、何を食ひ何を飲みなにを衣んと思ひ煩ふこと勿れ、これみな異邦人の求むるものなり、汝等の天の父はすべて是等のものゝなくてならぬ事を知り玉へり汝等まづ神の國とその正しきを求めよ、然ればこれ等のものは汝等に加へらるべし、この故にあすの事を思ひ煩ふ勿れ、明日は明日のことを思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり（馬太傳第六章）

まづ神の國とその正しきを求めよと云ふのは卽ち神を信ずることである、正しき神を信ずる者は、生活に必要な一切のものは自然に與へらる可きである、理は利也德は得なりと云ふことがある、或は又新しい心を得る者は從つて新しい着物ができると云ふ俚諺もある。

一切の慾心を去つて、まづ神の正しきを信ずるものは幸福であろ、心に求むるところなく、思ふところなく、卽ち心の貧しき者は、幸福を以て空しき心を滿たし得ると云ふのである。

心の富めるもの、卽ちいろ〳〵の慾望で一ぱいになつてゐるものは、その慾望が邪魔をして中々幸福が受け入れられないのである。

ポウロは、神は敬ふものはすべてのことに益ありと言つたが、神を信ずるものはまた氣苦勞がない、すべてを神に任せてゐるから心安らかである、從つて健康である。

酒を飲ます、賣春の女を近づけない、不養生をしないから、多くの場合、病氣になることが少ない、病氣になつても早くよくなる、と云ふのは萬事を神に任せてゐるから、靜かに處置を考へる。

千人わが前に倒れ萬人わが後に死ぬとも神われを守らん、われは神と共にあり、神のゆるしなくんばわれは死ぬことはないと云ふ確信がある、病氣は多くは人間が舌三寸の慾をおさへることが出來ないために起る場合が多い、然るに神を信ずるものは、己に克ち、神に依つてその舌三寸の慾をおさへると云ふことは有り得べきことである。

汝等のうち誰か苦しむ者あるか、あらば祈禱せよ(中略)汝等のうち誰か病めるものあるか、あれば教會の長老たちを招く可し、彼等主の名によりて之がために祈らん、そし信仰より出づる祈禱は病める者を救ふ可し、主は是を起さん、(中略)汝等互に過失を言ひあらはし、かつ病の癒さるゝことを得んために互に

祈る可し、正しき人の篤き祈禱は力あるものなり（雅各書第五章）

觀し來れば信仰は徹頭徹尾人間に幸福を與ふるものである、精神的にも、經濟的にも、はた又肉體的にも……

第八章　生活論

一　二つの要求

生活と云ふことに就て少し考へたい。

人間の生活上には少くとも二つの要求があると思ふ、一つは感情の上から言つたロマンチシズムで、もう一つは理性の上から見たナチラリズムである。

此の二つの要求を解釋することは、現代の思想や文藝にも密接な關係があるばかりでなく、知らず〳〵の内に人間日常の生活の上にも現はれる必要な事實である。

さうだ、人間の生活は感情的と理智的との二つに大凡區分される、いや、區分すると云ふよりも我々人間の内的生活を反省して其所に見出される複雜無數の要求中特にきわ立つた著しい二種類の要求に思ひ當るからである。

然して此の二つの要求は多少は人間の内的生活に思ひを潜めるものが少からぬ苦心を重ねる所であつて、生活經驗に關する最深要求であることに注意して欲しい。

われ〳〵は人間として善い生活がしたい、價値の高い生活がしたい、之が生活上の根本的の要求である。

初めから感情的とか理智的と云ふやうな區別はない、すべて全人格上の複雜な要求である、すべて實際上の切實な全的要求である。

然るに此の全的要求が分岐してそれ〳〵特殊な傾向を取つてくると、無數の傾向の中で特にきわ立つた二つが目について來る。

しばらく宗教上の要求に就て考へて見やう、われ〳〵人間は最後の安心を欲する確信を要求する。

この安心と確信とはどう云ふ境に見出されるか、或る種類の人は人生の實相の會得といふことに重きを置いてゐる。

人生の歸趣眞相が會得されゝば、そこに安心や確信が宿ると觀てゐる、事實、われ〳〵人間に避け難いのは斯う云ふ神秘的な要求である。

人間に不相應な無益なと疑ひつゝも尙ほわれ〳〵の運命に思ひめぐらして一種神秘な感に堪えない。

死はわれ〳〵に限りなき感想を與へる、茫漠として無際涯な天地の間に生死することは、畢竟何故であるか、如何にも不思議に堪えられない、それが全然無用な懷疑だといへば科學も哲學も畢竟無意味に歸してしまふ。

此の種類の要求は勿論その性質が甚だ複雜で、普通の意味に於て智的などいふ言葉で解釋の出來ぬことは勿論であるが、然しながらその根底の傾向から言へば高義に於て理性的であることは免かれない。

けれども、此の種類の要求と並んでさらに別種な宗教的要求がある、元來宗教上の安心とは自然の實相とか人生の歸趣の問題ではない。